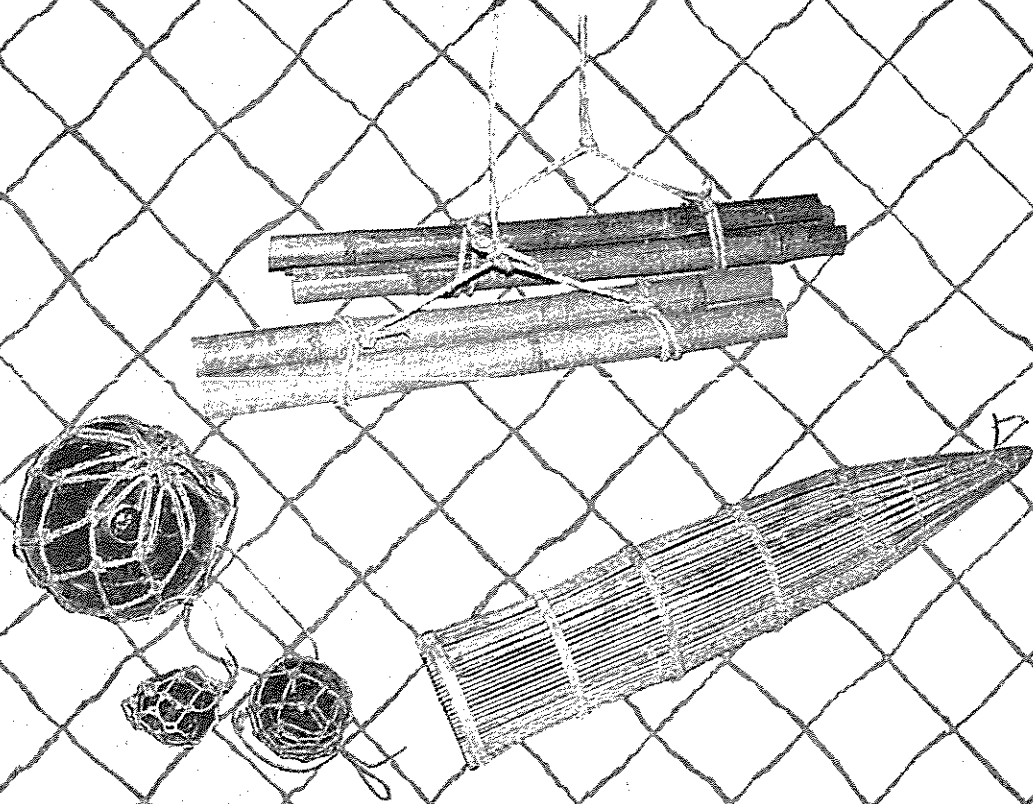


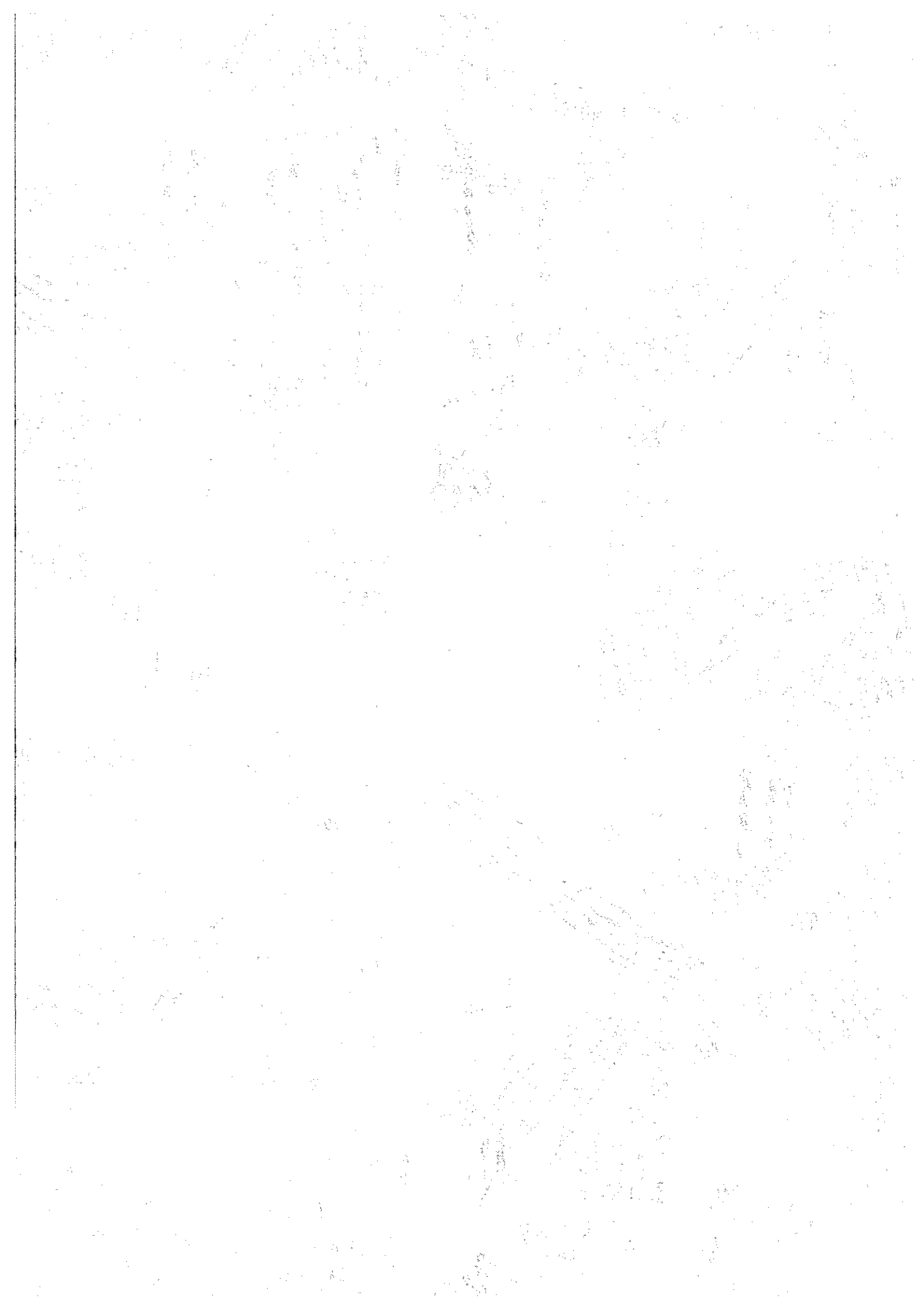
# 宮城県の伝統的漁具漁法 I

南部地区（松島湾周辺）



宮城県水産試験場

昭和63年3月



**漁村高齢者活力促進事業**

**宮城県 of 伝統的漁具漁法 I**

**南部地区（松島湾周辺）**

**宮城県水産試験場**

# 松島湾の伝統的漁法

## マハゼのジュズコ

### ジュズコの作り方



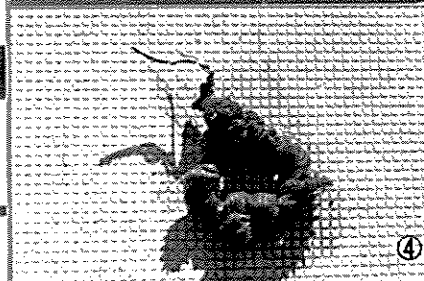
①



②



③

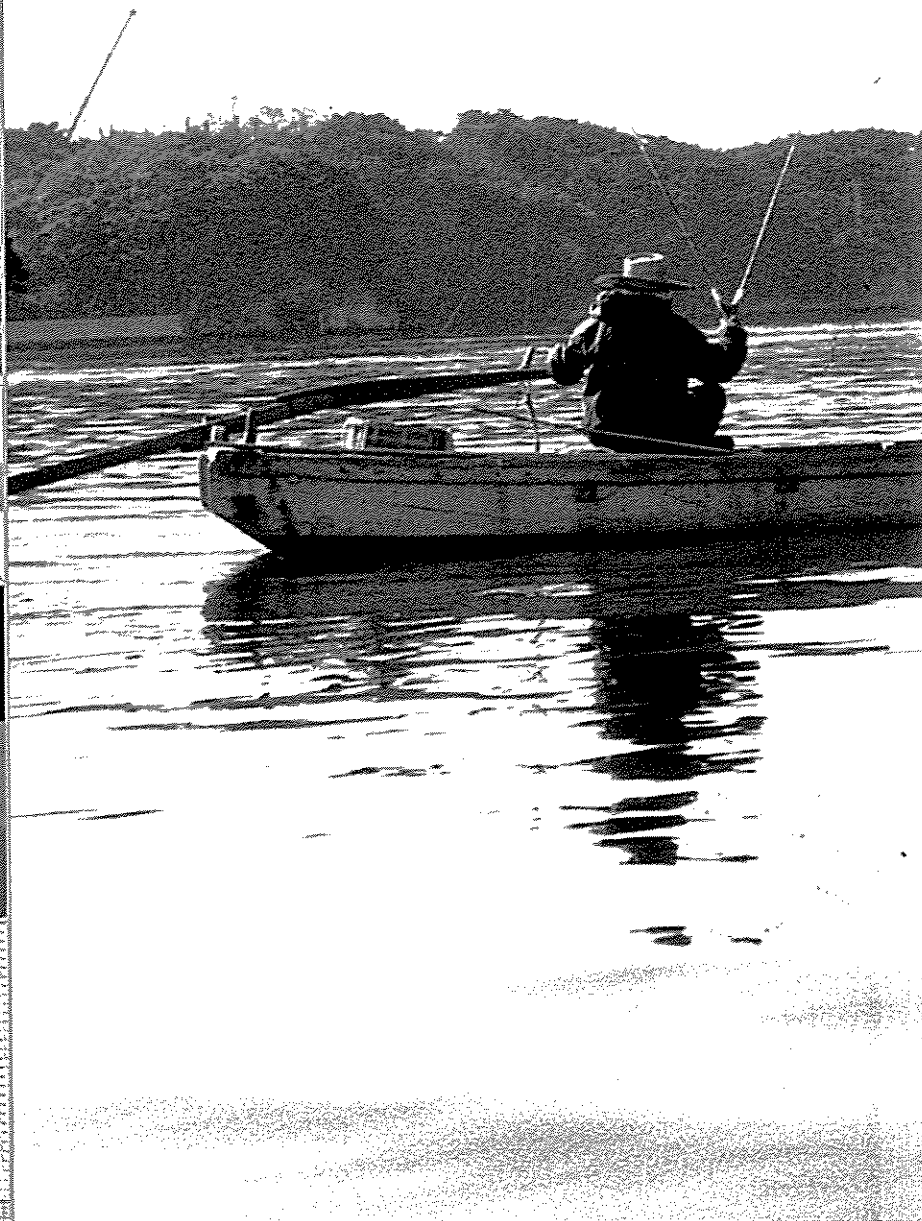


④



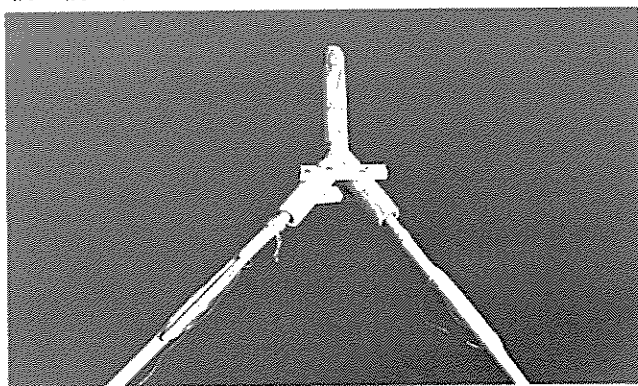
⑤

- ①ジュズコを作る針  
(針金を加工して縫針状にする)
- ②ゴカイ類を一本ずつ丁寧に通し刺しにする。
- ③通し終わったジュズコ
- ④ジュズコ2本を撚り合わせ、二つ折りにする
- ⑤出来上がった仕掛け



### ジュズコ釣りの竿(基部)

竿にも特徴があり、5尺ぐらいの篠竹などをY字型の桐の枝に取り付け、二股とする。



# 釣り

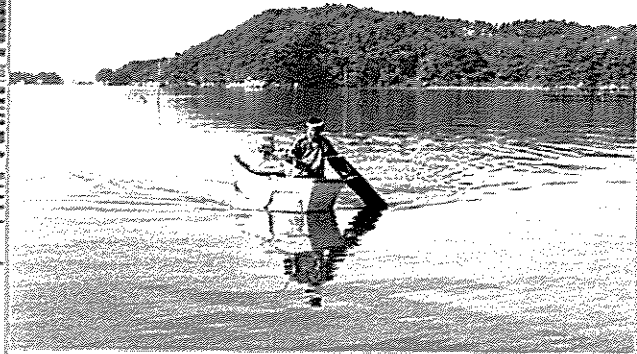
## マハゼのジュズコ釣り

松島湾のマハゼは、その独特な釣り方とともに、古くから有名である。ジュズコ釣りは、釣りには不可欠な鉤を使わず、ゴカイなどを糸に通したジュズコ（数珠こ）で釣る全国的にも珍しい漁法である。習得するまでには時間を要するが、魚を鉤からはずしたり、餌を付け替えたりする手間が省け、数を釣るには非常に効果的である。江戸時代から伝わるこの伝統的技法、刺網漁が主体となった現在も後継者に受け継がれている。

(本文参照)



### 釣り方



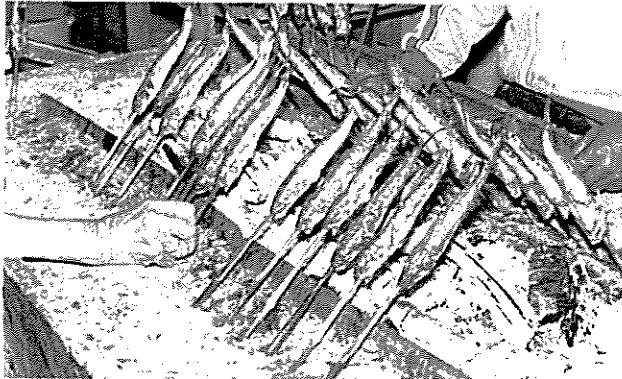
右手で竿、左手で櫂を操作する。静かに竿を上下させ錘が底をこづくようにする。



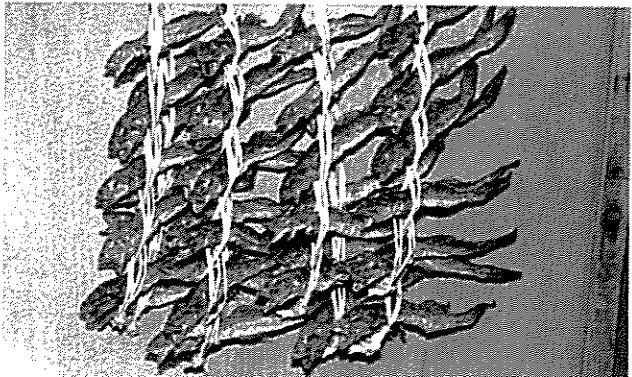
鉤がないため、取り込みにはコツがいる。揚げる途中で糸を緩めたり、必要以上に強く引かない。

### 松島湾特産マハゼの焼干し

一尾一尾炭火で丹念に焼き上げる。



ワラで束ねて干し上げる。  
仙台雑煮のダシとして珍重される。



# 発刊にあたって

近年における漁船、漁具等の進歩は目覚しく、その性能は著しく向上した。そのため、沿岸地先の小漁すらも操業形態が大きく変化し、漁獲努力量の増大につれて、資源の減少が深刻な問題となってきている。かつて、各漁村には小規模ながら、魚族の生態に応じた独特の漁具漁法が古くから受け継がれ、それらとともに操業の取り決めが固く守られて資源の管理がなされてきた。本県においても、養殖業が発展する以前は、四季折々に様々な漁法を駆使して漁家を経営していたが、現在、旧来の小漁のみで生計を立ててゆくことは難しく、近代化のもとに、それらの伝統的な漁法も消えようとしている。

これらの記録を残し、漁業後継者をはじめ、私たちの子孫に伝えることは重要であり、沿岸漁業の発達の間緯を知る上でなくてはならない資料となろう。

今回、漁村高齢者活力促進事業の一環として、宮城県の伝統的漁具漁法を取りまとめるにあたり、初年度は南部海域、特に地形的にも複雑であり、かつ、漁村数も多く、各種多様な地先小漁が見られる松島湾周辺海域に重点を置いた。以降、中・北部海域において、調査を進め、3編で完結する予定である。

漁具、漁法の収集、その取りまとめには、松島町漁業協同組合所属の赤間敏夫氏に並々ならぬ御尽力をいただいた。赤間氏は昭和13年より漁業に携り、各種の漁法に精通するばかりでなく、独自に漁具を改良、開発し、その普及にも努めてこられた。心から感謝申し上げるとともに、敬意を表する次第である。また、東北民俗の会の三崎一夫氏（日本民俗学会員）には、数々の貴重な御指導、御助言を賜った。ここに深く謝意を表するものである。

昭和63年3月

宮城県水産試験場長 渡 辺 競

# ○ 目 次 ○

## 宮城県の伝統的漁具漁法 I

### 南部地区（松島湾周辺）

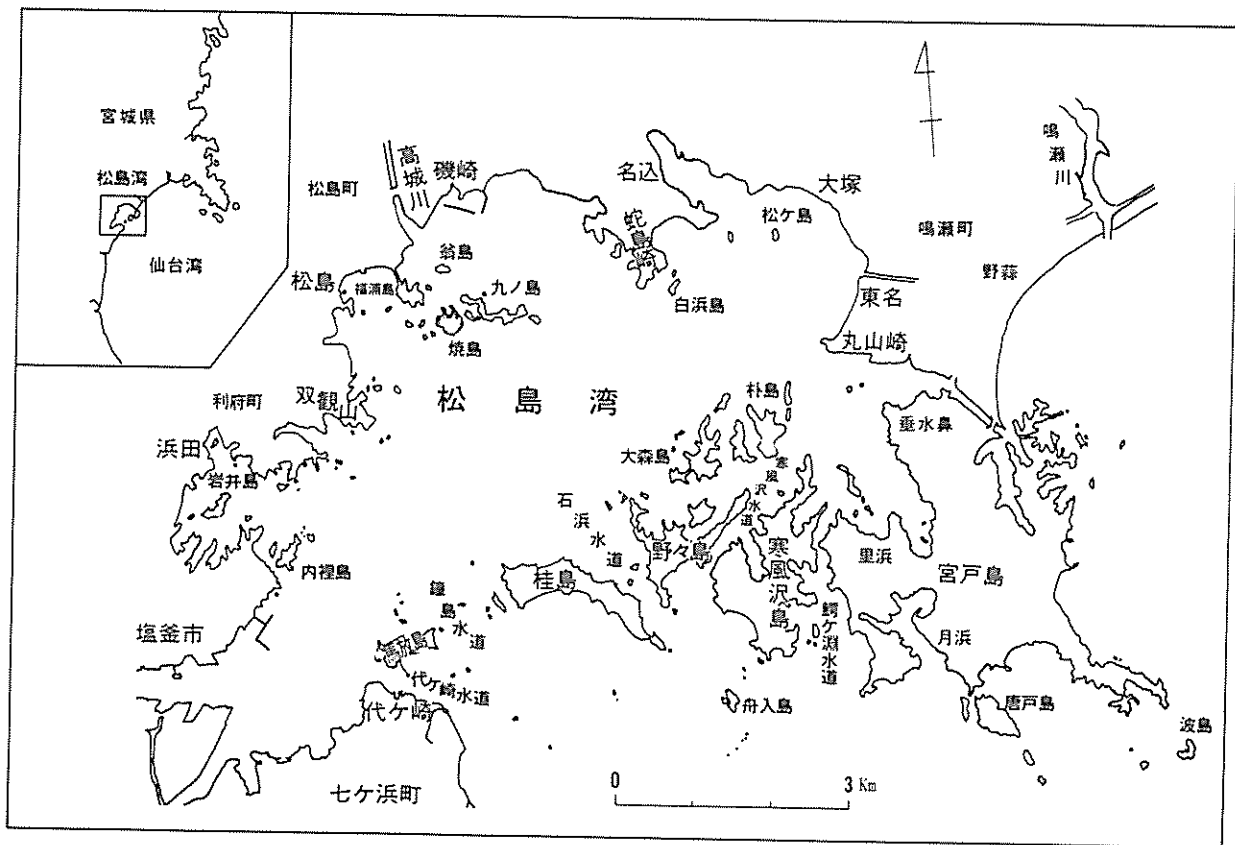
1. 松島湾の伝統的漁法 ————— マハゼのジュズコ釣り ————— (グラビア)	
2. 発刊にあたって .....	1
3. 松島湾の概要 .....	1
4. 各漁法の主漁期 .....	2
1. 小 漁 .....	4
① シラウオ漁 .....	4
モ ッ パ (四つ手網) .....	4
ト ボ シ .....	5
す く い 網 .....	5
刺 網 .....	5
② サ ヨ リ 漁 .....	6
浮 刺 網 .....	6
浮 延 縄 .....	7
③ ス ズ キ 漁 .....	8
底 釣 り .....	8
振 釣 り .....	9
曳 釣 り .....	10
延 縄 .....	10
④ ハ ゼ 漁 .....	11
ジュズコ釣り .....	11
延 縄 .....	13
刺 網 .....	13
⑤ ウナギ・ハモ漁 .....	14
釣 り .....	14
延 縄 .....	15
ウナギ搔き .....	16
ヨトボシ (夜灯し) .....	17
カツ搔き (徒搔き) .....	17
ウナギ胴 .....	18
タガッポ漬け .....	19
ボダ漬け .....	20

⑥	ネウ漁	21
	釣り	21
	延縄	21
⑦	カレイ漁	22
	釣り	22
	延縄	23
	刺網	23
⑧	オオガイ釣り	24
	浮釣り	24
	底釣り	25
⑨	ボラ釣り	25
⑩	イシモチ釣り	26
⑪	スイ釣り	27
⑫	アピコ網	28
⑬	エサダ・エビ網	29
⑭	コノシロ・ハジキエビ網	30
⑮	スバリ漁(簀張漁)	31
⑯	カニ漁	32
	ガザミ釣り	32
	カニ縄	33
	カニ籠	34
⑰	アサリ漁	34
⑱	ナマコ・ニシカイ漁	35
⑲	エバ掘り	36

## 2. 定置網漁

①	ツボアミ(小型定置網)	38
②	スマキ(簀建)	39





## 松島湾の概要

松島湾は宮城県の南部に位置する仙台湾の1支湾であり、内水面積35.3km<sup>2</sup>、水深2～3mの浅海である。仙台湾とは代ヶ崎、鐘島、石浜、寒風沢、鰐ヶ淵、潜ヶ浦の6水道によって連なっている。大小230余の島々が散在し、日本三景の一つとしても古くから有名である。

沿岸は七ヶ浜町、塩釜市、利府町、松島町、鳴瀬町の1市4町に亘り、各水道部より内湾には、合計10単協の漁業協同組合があって、現在はノリ・カキ養殖業、アサリなどの採貝藻漁業が主に営まれている。湾奥部に流入する高城川では、昭和54年よりサケのふ化放流事業が開始され、昭和59年には、収容能力300万粒規模の松島町さけますふ化場が建設された。さらに、昭和58年からは、アサリの大規模増殖場の造成が始まり、湾内各所にアサリ漁場の拡大が図られている。

# 各 漁 の 主 漁 期

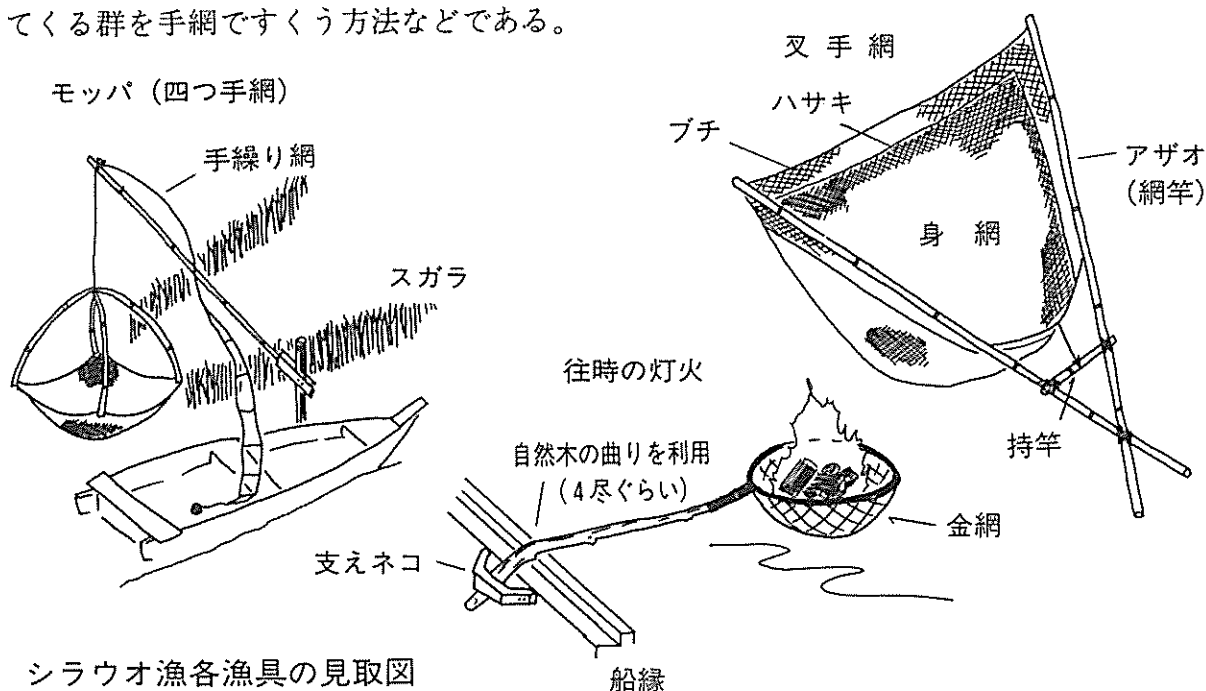
漁 種	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
シラウオ漁													
モッパ			■	■	■								
トボシ			■	■	■								
すくい網				■	■								
刺網			■	■	■								
サヨリ漁													
浮刺網					■	■	■	■	■				
浮延網						■	■	■					
スズキ漁													
底釣り								■	■	■	■		
振釣り									■				
曳釣り										■	■	■	
延縄								■	■	■	■	■	
ハゼ漁													
ジュズコ釣り										■	■	■	■
延縄												■	■
刺網												■	■
ウナギ漁													
釣り								■	■	■			
延縄								■	■	■	■		
ウナギ掻き		■	■	■	■								■
ヨトボシ								■	■	■	■	■	
カツ搔き					■	■	■	■	■				
ウナギ胴					■	■	■	■	■	■	■	■	
タガッポ漬け					■	■	■	■	■	■	■	■	■
ボダ漬け							■	■	■				
ハモ漁													
釣り									■	■	■	■	■
延縄									■	■	■	■	■

漁種	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ネウ漁													
釣り													
延縄													
カレイ漁													
釣り													
延縄													
刺網													
オオガイ釣り													
浮釣り													
底釣り													
ボラ釣り													
イシモチ釣り													
スイ釣り													
アピコ網													
エサダ網													
エビ網													
コノシロ網													
ハジキエビ網													
スバリ漁													
カニ漁													
ガザミ釣り													
カニ縄													
カニ籠													
アサリ漁													
ナマコ・ニシカイ漁													
エバ堀り													
ツボアミ													
スマキ													

# I 小 漁

## 1 シラウオ漁

かつて、シラウオ漁は「七草粥（旧正月7日）を食ってから」と言われており、その頃が操業開始の目安とされていた。大正～昭和初期は編網技術が進んでおらず、漁網の入手が容易でなかったため、自ら手すきの網を作製していた。シラウオ網は目合いが25～30節と細目であるため、手で編むには大変な労力と根気が必要とされた。したがって、刺網漁が出現するのは、それ以降であり、それまではすくい網漁が主体であった。すくい網漁は大きく分けて、次の3通りになる。まず、モツパと呼ばれる四つ手網を用いた待網漁、次に灯火を利用して魚を集め、叉手網ですくい獲るトボシ漁、そして、春季に砂浜へ接岸してくる群を手網ですくう方法などである。



シラウオ漁各漁具の見取図

### モツパ (四つ手網)

この漁法は、予めスガラ（笹竹や雑木の枝を八の字型に建てて垣としたもの）と呼ばれる誘い垣を作り、奥の魚が集まる所に船を置いて、四つ手網によってすくい揚げるものである。スガラの長さは50間ほどあったとされている。昭和7～8年頃までは、松島湾奥部の高城川河口周辺で数ヶ統の施設があったが、現在は全く見られない。この漁ではシラウオのほかにコイ、オオガイ（ウグイ）、ウナギなども漁獲されることがあった。また、この漁に灯火を使用して、夜間操業することもあったという。

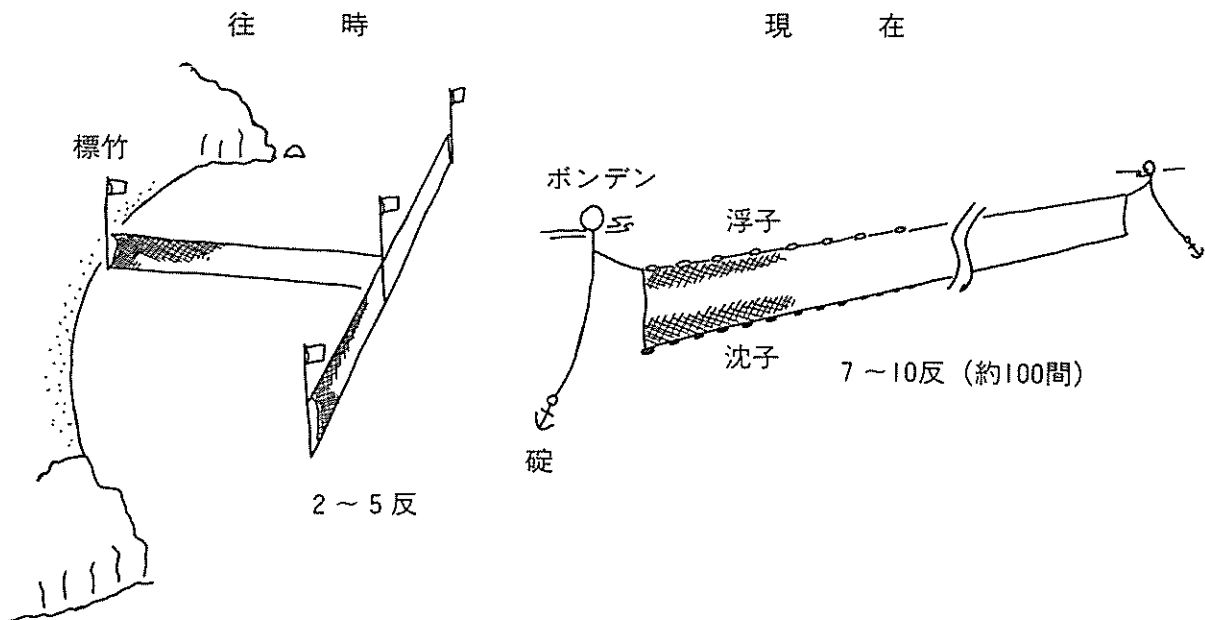
## トボシ

灯火を利用した夜間の漁で、かつては脂の多い松の根を燃料としていたが、昭和初期になるとカーバイドランプが普及するようになった。方法は船の舷側からトボシ（光源）を柄に付けて水面にかざし、魚が寄って来るのを待ってすくい獲るもので、1～2尾の魚影を認めると、灯火を消すか船内に引込め、一旦暗くする。すかさず、叉手網でメクラすくいし、すぐに灯火を点灯した後、網の魚を取り込む。この作業を一晩中繰り返して、多い時では1升も漁獲されたという。

## すくい網

かつては、4月頃になるとシラウオが群をなして砂浜の汀線近くを泳ぎ回ることがあった。群れが濃い時は海面が鉛色に変わったという。それを砂浜で焚火をして待ち、魚影を認めると、手網を持って海に飛び込み、すくい揚げるというものである。すくう時は必ず魚の群の進行方向から網を入れることが肝要で、後方からでは絶対にすくえない。

## 刺網



シラウオ刺網見取図

刺網によるシラウオ漁は、昭和の初期以降に編網機が開発され、細目の網地が市販されるようになってから始められた。この頃の網地の材質は、麻糸、綿糸、絹糸などで、特に絹糸は上質とされた。しかし、現在のような化学繊維とは異なり、ケバが多く、水を吸っ

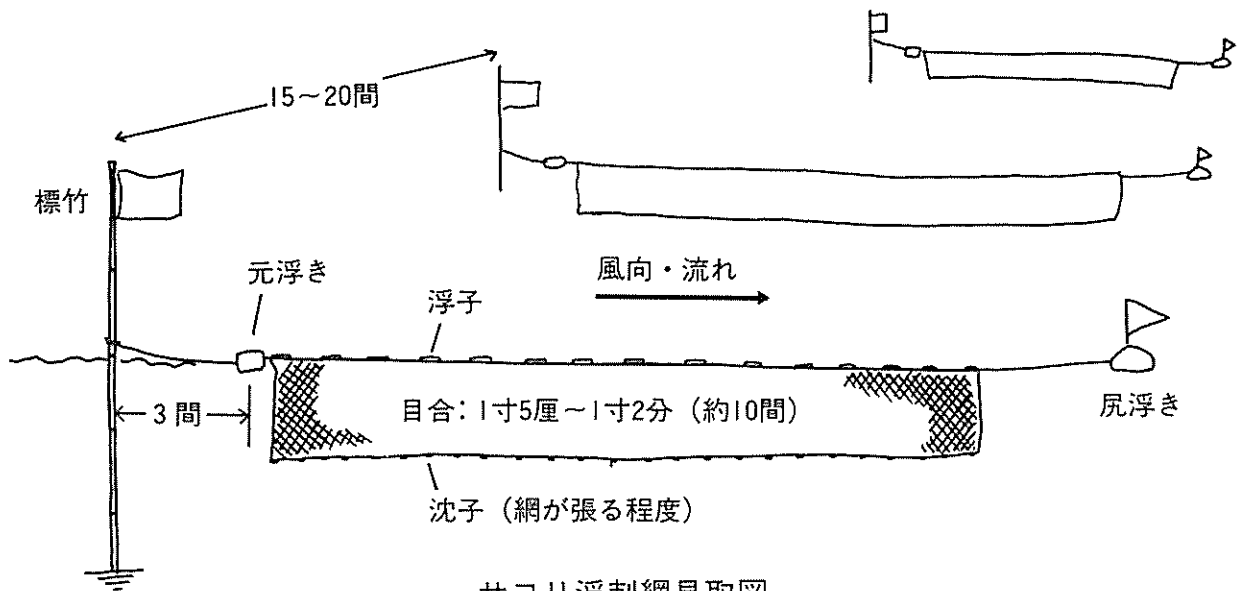
て太くなり、耐久性もかなり劣っていた。それでも容易に入手できるわけではなく、1人の持ち網が2～3反、多い人で5反ぐらいであったが、トボシ漁と併行して操業し、かなりの漁獲があったという。その頃の売買は1尾いくらで取引され、50尾ずつ経木の折箱に詰めて出荷していた。

その後、昭和27～28年頃になると、化学繊維のアミラン撚糸漁網が出回り始め、さらに現在では撚糸でないナイロンテグス網が使用されるに至っている。以前の網と比べると、格段の漁獲効率の進歩が見られたが、逆に漁獲量は減少してきている。

## 2 サヨリ漁

サヨリは春になると、松島湾の奥部にも姿を見せるようになる。4月10日頃を目安にして試験的に刺網を刺し、1反あたりに2～3尾も掛かっていたら好期到来となる。サヨリは入江の浅瀬まで乗っ込んでくるが、かつての好漁場であった入江も干拓され、往時の面影も見られない。

### 浮刺網

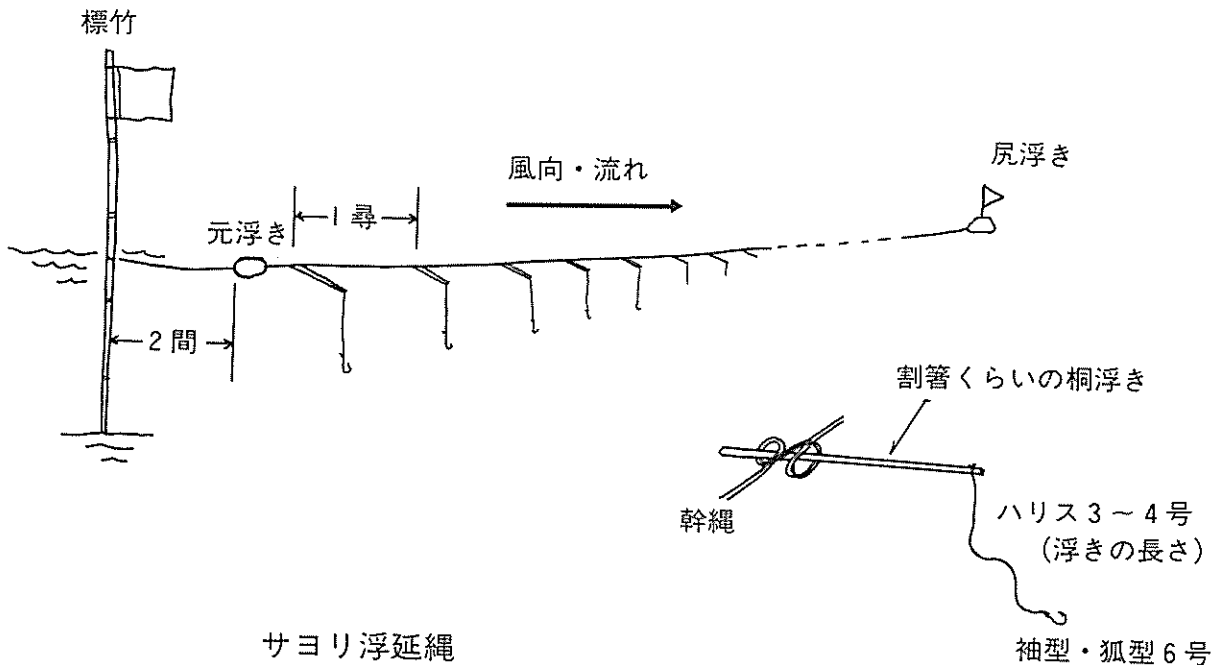


一般にサヨリ刺込網と呼ばれており、網の一端を竹の支柱や碇で固定し、他方を潮流や風によって流し、常に網が張っているように仕掛ける。サヨリは表層を泳ぎ回り網に突き刺さるので、沈子は網が立つ程度の小型にする。目合は魚体に大小があるので、それに応じて使い分けるが、およそ1寸5厘～1寸2分である。

この仕立ての網を用いて、サヨリ浮流網も行われた。これは、刺込網を継ぎ合わせるかし

て70~80間にし、潮上から流れを横切って伸展させ、流れにまかせ掛かった魚を取り込む方法である。網は風や流れによって寄り集まってしまうこともあり、その都度、引き揚げ再び潮上に伸展し直す。

## 浮延縄



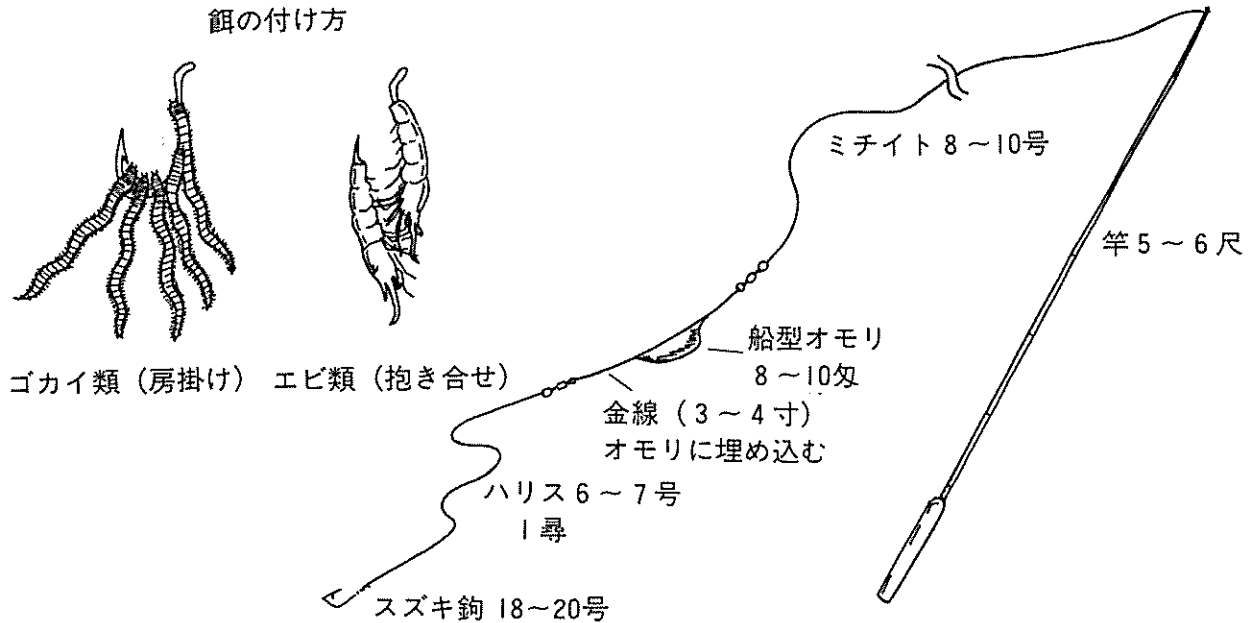
入江の浅瀬での刺網漁の最盛期が過ぎる4月下旬~5月上旬になると、サヨリナ(縄)が行われる。サヨリナの全長は25~30間で、1尋間隔に割箸ほどの桐浮きを付け、その先端に浮きの長さと同じテグス(3~4号)を結び、それに袖型か狐型の釣針(6号)を付ける。餌はこの時期に柴漬けで獲れるシバエビのムキ身を用いる。漁場は湾内の沖合で、船を固定し、まず旗を付けた尻浮きを潮下へ流す。餌を掛けながら縄を送り、最後に元浮きを浮べ、2間ほどの綱を付けて支柱竹に結ぶ。この要領で6枚ぐらいの縄を仕掛け、順に見回って、魚が掛かっていたらはずし、新しい餌に付け替える。

この方法でダツも漁獲され、餌をミミズに替えることにより、ボラナ(縄)としても使用できる。昭和40年以降になると、湾内で餌になるエビが獲れなくなったのと、飛行機網と称する2艘曳き漁法が開発されて漁場が荒れ、現在では、このサヨリナを行う者はほとんどいなくなった。

### 3 スズキ漁

スズキは刺網や定置網でも漁獲されるが、ここでは、古くから行われているスズキを専門に対象とした釣りと延縄漁法を紹介する。

#### 底釣り



スズキ底釣り漁具見取図

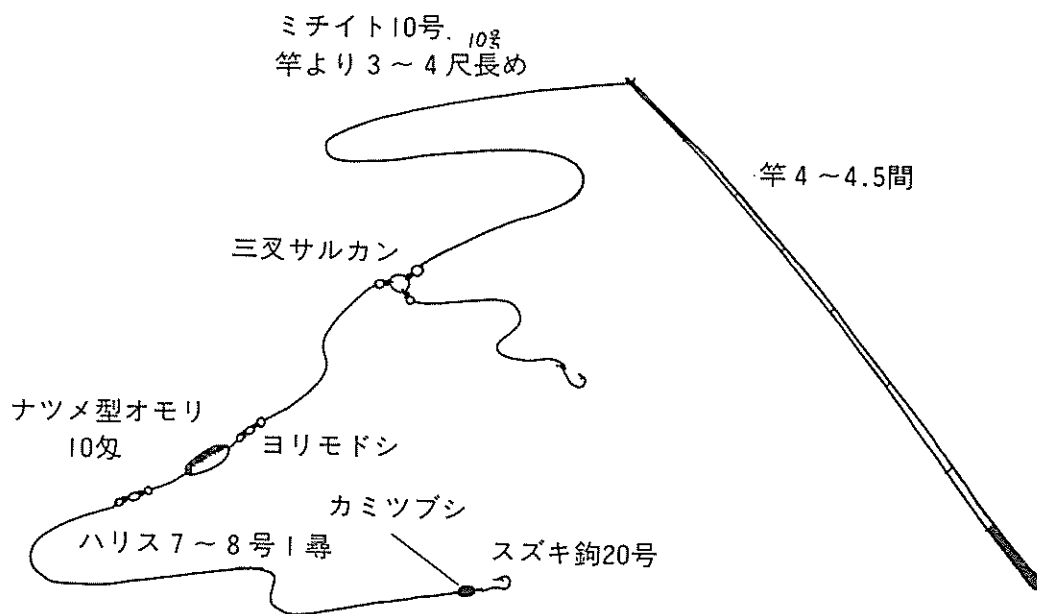
この漁法は古くから行われていたが、戦後はほとんど見られなくなり、技法についても伝承されることがなかったため、しばらくは「幻の釣り」とされていた。その中で唯一、松島海岸の故宮田丹治氏が戦後も細々として行っていたが、その技法を決して他言することはなかった。その後、赤間敏夫氏が模索と工夫改良を重ね、スズキの底釣りを復活させた。

仕掛けは図に示す通りで、餌のエビは尾を切って2匹抱き合せにする。ゴカイ類の場合は房掛けである。漁場は外洋に面する湾口部で、海底に根が突出しており、潮流を形成したりする場所が最適である。漁期は6月下旬~9月下旬までで、大潮時の3~4日間に好漁が期待できる。方法は、櫓を加減しながら、若干流れに逆らう程度に船を流す。タナの取り方がポイントとなり、海底の起伏に応じて、餌が底から1.5~2尺になるよう調節しなければならない。当たりはゴミが掛かったような感じで、これは底釣り特有のものである。取り込みの際には、スズキ独特のエラアライ（水面近くで跳び上がり、口を大きく開けて頭を小刻みに震わす動作）をさせないことが肝要で、そのためには、魚に余裕を与え



ず、手繰ったり伸したり、常に釣糸を張った状態に保たねばならない。また、魚の大小にかかわらず、手網で引き揚げるのが無難である。

## 振 釣 り



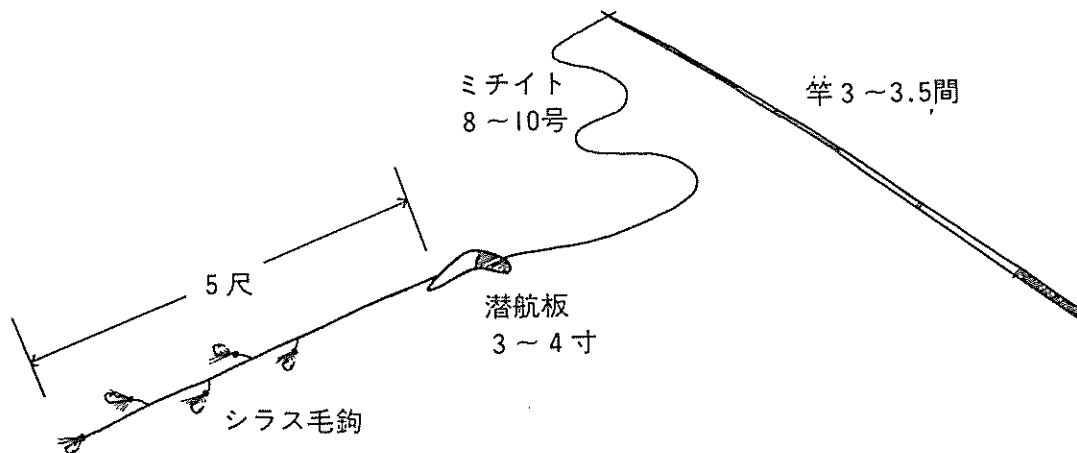
スズキ振釣り漁具見取図

底釣りでは中・小型のスズキが主体となるが、この釣りは大型のスズキを狙い、外洋の岩礁域で波が荒く泡立つ中で船を操り、4間ほどの長竿で釣り上げる豪快な釣りである。

スズキが餌を追って、浮上してくるのを釣るため、簡単に跳び上がり、エアライを連続するので、バラス確率が高く、あまり釣果は上がらない。漁期は夏の土用の頃の大潮期で、上げ潮8分前後の1時間が勝負となる。振釣り用の竿は、長さ4~4.5間の唐竹もしくは布袋竹で、仕掛けは図に示したものである。ナイロンテグスのなかった当時は、道糸に麻を撚ってカキ渋で染めて使っており、ハリスはクリムシから採った本テグスを酸に浸してしごいて作ったものを継ぎ合せて使用していた。

釣り方は、手漕船の2人乗りで、漕ぎ手と釣り手の分担が望ましい。漁場に着いたら、スズキの群が根の周辺の波間に見え隠れするのを見定めて竿を振る。餌が水面下2~3尺を維持するようにして、竿を横に回す。当りがあれば軽く合せ、スズキが極力跳び上がらないように操作しながら手網に取り込む。この時、漕ぎ手は船を根から遠ざけるように漕ぎ出していなければならない。

# 曳釣り



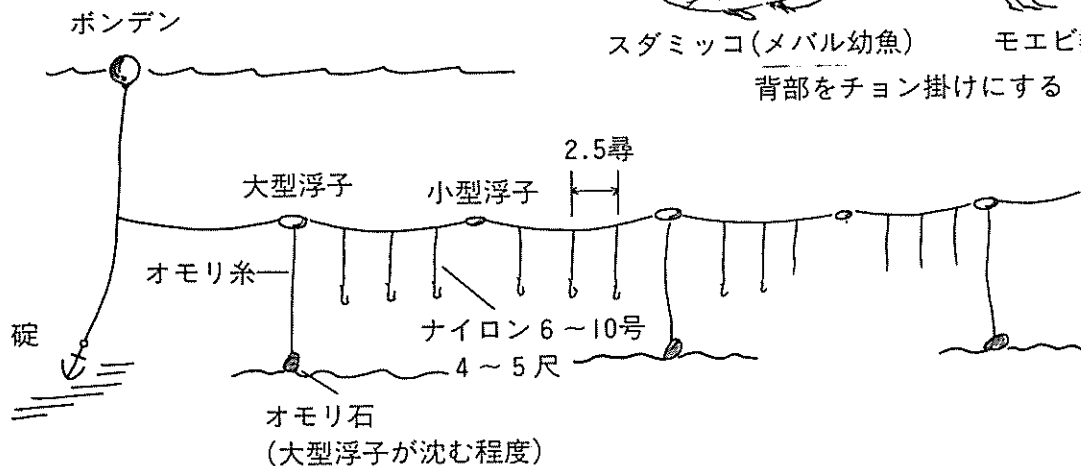
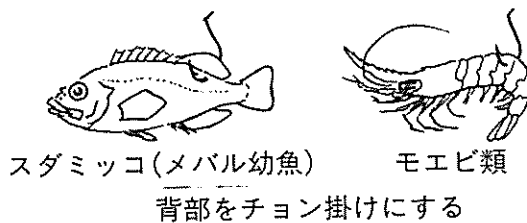
スズキ曳釣り漁具見取図

潜航板を使い擬餌鉤を曳いて、主に当才魚や1年魚を狙う漁法で、9~10月頃、湾内の滞筋などで行う。特に明け方の上げ潮時に、これらの群がハネを見せていることがあり、その周囲を静かに走航しながら、潜航板を下ろす。擬餌針が踊るように操作しながら進み、1~2尾掛かってもそのまま進め、他の魚を誘って、なるべく多くの魚を掛けることがポイントとなる。時には5~6本付けた鉤に全部掛かることもある。また、2年魚以上の大型魚も掛かることがあるが、鉤が小さいためにバレやすい。

近年になって、外洋で行うトローリングが普及し、3年魚以上の大型魚も漁獲されるようになった。

# 延縄

餌の付け方



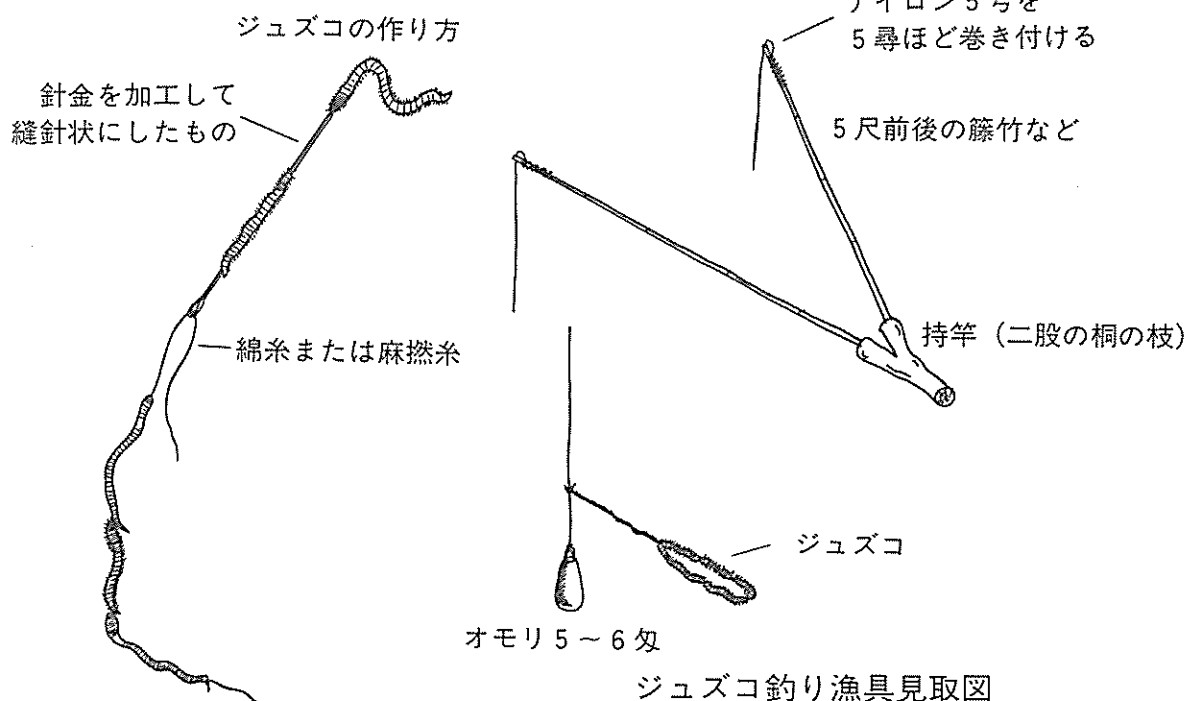
スズキ延縄見取図

スズキ延縄漁はギバナまたはイケベアイと呼ばれ、一種の浮延縄である。漁期は6～10月で、湾内一円と外洋に面した岩礁地帯で行われる。湾内で漁獲されるスズキは1～2年魚で、外洋では2年魚以上となる。クレモナの幹糸に2尋半間隔でナイロンテグス（6～10号）のハリス（長さ4～5尺）を40～60本付ける。鉤は稲妻型の16～18号を使用し、重り石は浮子が沈む程度に調節する。餌はスタミッコと呼んでいるメバルの幼魚（体長3cm前後）で、湾内のアマモ場で採集する。鉤に付ける時は、背ビレの後方をチョン掛けにし、揚縄時まで生きてるようにしなければならない。また、餌にエビを用いる場合も同様に腰の曲りにチョン掛けする。

## 4 ハゼ 漁

マハゼは松島湾の名物の一つであり、ハゼ釣りは秋の風物詩として、古くから親しまれてきた。ハゼの焼干しは、仙台雑煮のダシとしてなくてはならないもので、現在でも年末にはかなりの需要がある。沿岸の業者が串に挿して炭火で焼き、ワラで5尾ずつ編んで、それを2本に束ねて1連とし、主に仙台方面に出荷している。また、近年の釣りブームも相俟って県外からの遊漁者も増加しており、松島湾のマハゼは全国的にも脚光を浴びるようになった。しかし、このマハゼも昭和50年以降一時全く獲れなかった時期があり、その原因は現在でも確実に究明されていない。その後、昭和56年頃より徐々に増えはじめ、59年からはかつての盛況を取り戻すに至っている。

### ジュズコ釣り



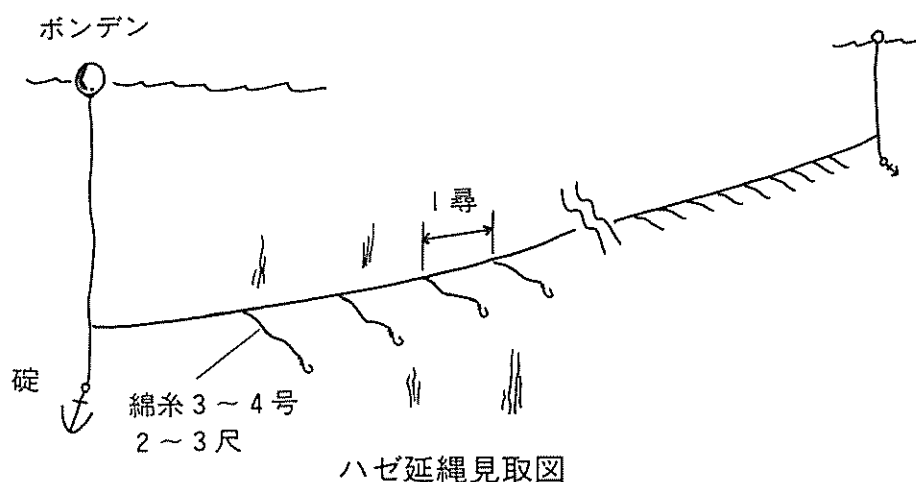
松島湾のハゼ釣りを代表するものがジュズコ（数珠こ）釣りである。ククシ釣りとも呼ばれ、仕掛けは簡単であるが効率は抜群であり、釣りには不可欠な鉤を使わない全国的にも珍しい技法である。この釣りの起源は不明であるが、江戸時代から行われていたらしい。

ジュズコ釣りの由来は、真鍮の針金（18番線）を8寸ぐらいの縫針状に加工したもので、綿糸または麻の撚糸にイソメとミミズを交互に挿し通して作った餌の数珠を用いるところから来ている。このジュズコを8寸ぐらいの長さにし、2本を撚り合せて一つにして、さらに二つ折りの輪を作る。これを錘（5号ぐらい）の上に糸で付けて仕掛けが出来上がる。竿にも特徴があり、長さ5尺ぐらいの大名竹や篠竹を2本用意し、二股になった桐の枝に付けてY字型に作る。それぞれの竿先には5号程度の道糸を5尋前後巻き付け、竿の先端に入れた切れ込みに挟んで道糸の長さを調節する。最近は竿にガイドを付けて道糸を通し、手元に糸巻きを取り付けたものも見られるようになった。

ジュズコ釣りの要領は、船を潮の流れに乗せ、流れと風向を勘案して左手で櫓や櫂を操り、右手で静かに竿を上下させ、錘が底をこづくようにする。当りは水温が高い8～9月中旬までは、かなり乱暴で横に引っ張るような食い方をする。その後、水温低下とともに食い付きが穏やかになり、釣り揚げるのも楽になってくる。水深2m前後の浅場では、スッポ揚げといって、食い付いたら静かに素早く一気に引き揚げる。4～5mの場合は2～3回に分けて手繰り揚げる。いずれの場合も、鉤がないので引き揚げる途中で糸を緩めたり、必要以上に強く引いたりすると、ハゼが餌を離してしまう。この辺の勘を習得するのに多少の時間を要するが、覚えてしまうと実に効率的な釣り方で、食いが立ってきた時にいちいち魚を鉤からはずしたり、餌を付け替えたりする時間を省略できる。慣れた人だと1回の操業で1～2束（100～200尾）は楽に釣り揚げる。また、1つのジュズコにハゼが2尾同時に食い付いてくることもよく見られる。

かつては、8月15日を松島湾のハゼ釣りの解禁日としていたが、昭和20年以降になると遊漁者などの増加にともない、申し合せが破られ、春早くから釣られるようになった。しかし、漁業としての釣りは、1年魚のハゼが大きくなり、また、需要が高まってくる8月下旬からである。10月上旬頃までが釣り漁で、それ以降は延縄や刺網が主体となる。

## 延 縄



ハゼ延縄見取図

ハゼ延縄はカツカナブチ（カツカはマハゼの方言，ナブチは縄打ちのこと）と呼ばれ，主に旧暦の10~12月に操業していた。幹糸には10~12号の綿糸を120間（もしくは尋）ほど用い，ハリスとして，3~4号の綿糸2~3尺を100~120本付けて一枚とした。鉤は袖型または田辺型の10~12号で，餌として小型の蒸しエビや活きエビ，あるいは，イカの切身などを用いた。延縄を専門に行う者は，25~30枚使用した。縄打ちの時刻は季節によって異なり，漁期の最初は「昼縄」といって日中でも食い付くが，やがて，日没頃に縄を入れ，2~3時間して揚げる（宵揚げ）ようになる。次に「明け縄」といって早朝の東空が白み始める頃に打ち，それでも食い付きが悪くなると，「留め縄」で宵に打ち，明け方に揚げる。終期になると，餌のエビも獲れなくなり，イカの切身を使用するようになるが，イカを餌とすると，ハモ（マアナゴ）も混獲されるようになり，時にはハゼよりもハモの方が多く掛かることもある。平均して，ハゼは延縄1枚当り10~20尾，多くて30~40尾である。かつては，櫓と帆を頼りに泊りがけで，牡鹿半島の荻ノ浜方面まで遠出する者もあった。

## 刺 網

戦前にはなかった漁法である。偶然サヨリ浮流網が，底に引っ掛かり，それにハゼが何尾か掛かったことがあった。それをヒントに，昭和33年頃からサヨリ網を底刺網に仕立て直して操業したところ好成果があったので，以来種々の改良を加え，現在のような仕様になった。刺網漁としては，昭和34~35年頃から始められ，40年以降に広く普及した。当時は網の素材にアミラン撚糸を使用していたが，現在ではほとんどナイロンテグスであり，耐久性，羅網率とも著しく向上した。目合は1寸2分前後で，1回に50~100反使用し，

200～500尾も漁獲される。

釣りや延縄が主体であった頃は、水温低下とともにマハゼの摂餌も不活発になり、それにつれて自然と漁獲量も減少し、一種の資源保護になっていたと考えられる。マハゼは水温低下とともに成熟し、まず雄が底泥中に産卵孔を掘って待機し、雌がそれを探して中に入り、一対で産卵することが知られている。したがって、刺網は低水温期においても、摂餌意欲の有無にかかわらず漁獲することが可能なため、成熟雌を漁獲する割合が高い。さらに、漁獲効率や漁獲努力量も以前より、かなり高まってきているため、乱獲につながる危険性も無視できない。松島町の磯崎地区では、ハゼ刺網の操業期間を11月中旬～12月下旬と取り決めているが、他地区では特に制限がなく、資源生態学的知見に基づく全湾的な規制が望まれる。

## 5 ウナギ・ハモ漁

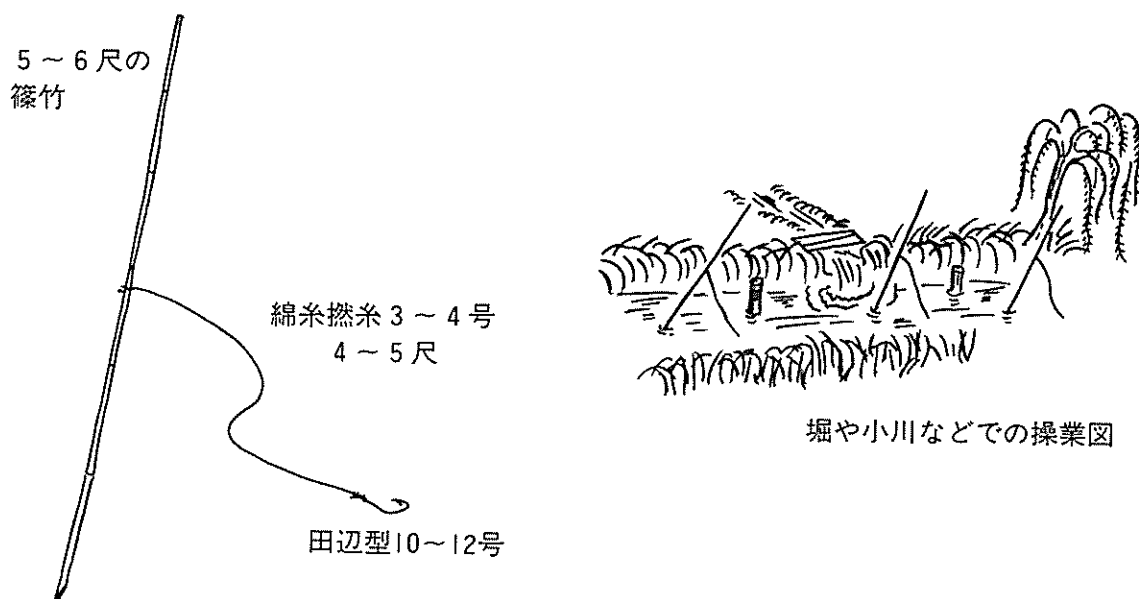
ウナギはマハゼと並んで、松島湾の名物であり、周年を通じて何らかのウナギ漁が行われ、主要な収入源となっていたが、近年はその漁獲量が著しく減少し、ウナギ漁では収益があげられなくなった。

### 釣 り

ウナギ・ハモ（マアナゴ）の釣りは、ハゼ釣りと全く同じジュズコ釣りの技法を用いる。ただし、餌はゴカイ・イソメ類だけを撚り合せてジュズコを作り、夜間に釣るところが異なる。かつては5月の八十八夜を迎えるとウナギ釣りを始めたという。

夕方、船を出し、目的の場所に着くと棹を挿して船を固定する。左右両舷から竿を出し、竿先を4～5寸上下させ、ジュズコを踊らせるようにする。やわらかな重みを感じたら、竿の運動を止め、静かに引き上げるが、間もなくウナギ独特の回転するような力のある引き方をするので、調子を合わせながら徐々に水面近くまで引き上げ、素早く船上に揚げるのだが、かなりの技術を要する。7～8月頃には昼間でも釣れることがあり、特に雨上がりの濁りが少々ある時は好条件となる。ハモもウナギと同様にして釣れるが、最近では、サバ、イワシ、イカなどの切身を餌に、鉤を用いた仕掛けで釣ることが多く、遊漁としても人気を集めている。漁期はウナギより遅く、8～11月である。

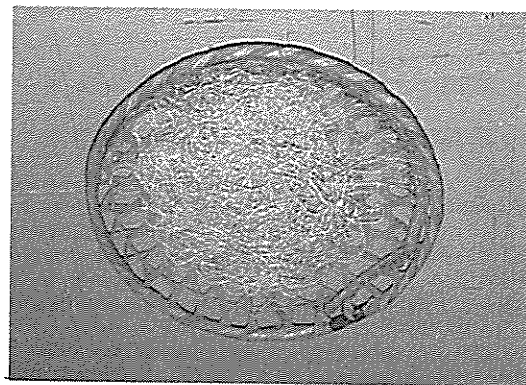
## 延 縄



ウナギ釣漁具見取図

ウナギ縄もハモ（マアナゴ）縄も基本的には他の底延縄と変らない。ただし、ウナギは沼や堀にも生息するので、このような場所に仕掛ける時は延縄式ではなく、5~6尺の篠竹に3号の撚糸を4尺程結び、田辺型10号の鉤を付ける。餌はシバエビ、ドジョウの切身ヤゴ、ミミズなどで、チョン掛けにする。この仕掛けを沼や堀の用排水の流れ込む場所や深みに竹を挿して仕掛けておき、翌朝引き揚げる（ウナギ釣と呼ぶ）。この漁は4月中旬から始まり8月末には終漁となる。

延縄漁は海や川で行い、5月中旬から10月頃までが漁期となる。仕様はハゼ延縄と同様であるが、ハリスの長さを5尺にして、間隔を3尋にする。鉤の数は1枚（鉢）あたり30本前後となる。餌は柴漬けで獲ったエビを生かしておいて用いる。ハモ縄の場合と異なり、ウナギを狙う時は、3~4枚を用い、繰り返して操業するので、10回の繰り返しには餌のエビを、900~1,200尾用意する必要がある。5月も下旬になるとかなり水も暖められ、盛期を迎える。水深7~8寸くらいの浅瀬で、藻がまばらに繁茂しているような所がよく、荒天の前後が好漁となる。4枚の縄を繰り返して打ち、3~4貫のウナギが漁獲された。鳴瀬川の河口付近は好漁場で、ここで

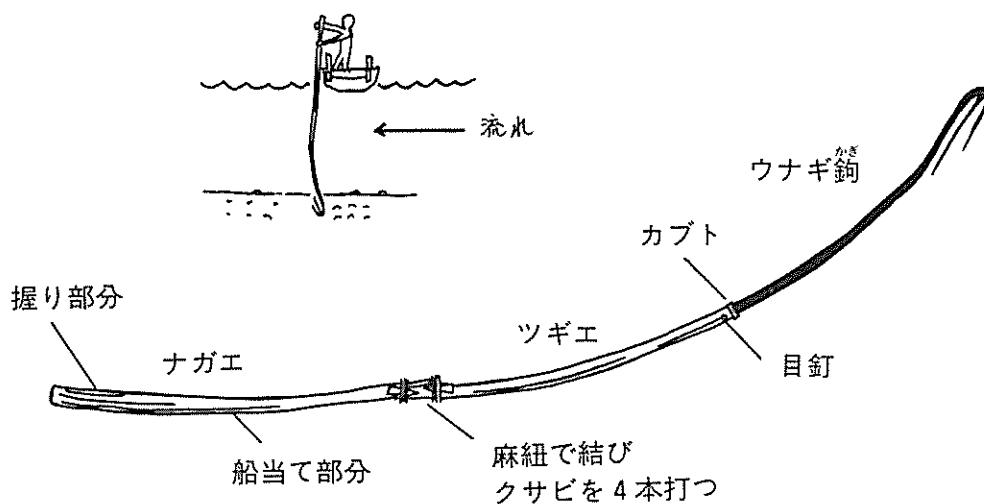


ハモナ（ハモ延縄）

操業する時には餌にミミズを使用するが、本命のウナギ以外にスズキ、イシモチ、コチ、クロダイ、アカエイ、ナマズ、ライギョ、コイなど海や川の様々な魚種が混獲され、その方の収益が多いこともある。なお、ハモ縄は8～10月に操業され、餌には、アピコ（ヘビハゼ）やイカの切身を用いる。

## ウナギ搔き

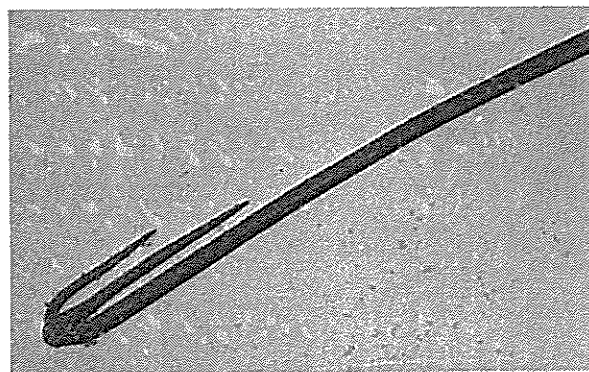
操業図（船搔き）



ウナギ搔き漁具見取図

泥中にもぐっているウナギを<sup>かき</sup>かきで搔き揚げる漁法で、季節により若干方法が異なる。まず、「船搔き」と呼ばれ、11月から翌2月までの間、越冬のためやや深くもぐっているウナギを獲る方法である。船を風上に回し、風に対して船を横に流しながら、船の中央で図のようなウナギ<sup>かき</sup>かきを付けた棒を海底の泥の中に1～1.5尺突き立て進み、手ごたえがあるとわずかに力を加え、静かに引き抜けば確実に掛かっており、水の抵抗をかけながら引き揚げる。

次に「バタカキ」と言い、春になって夜間は索餌のため活動し、昼間は泥に浅く潜んでいるようになったウナギを獲る方法である。ウナギ<sup>かき</sup>かきは船搔きのものより薄目の軽い鉤を用い、柄もしなやかな竹にする。冬季の船搔きで漁獲の多かった場所を重点的に、まず左側から鉤を海底に突き立てる。この際、鉤の



ウナギ<sup>かき</sup>かきの先端部



先が海底に触れる程度にし、深く突き入れない。そのまま一気に右方向に搔き揚げ、次いで反対方向に同じ要領で搔く。これを繰り返すのだが、この間、船搔きと同様に船を流す。

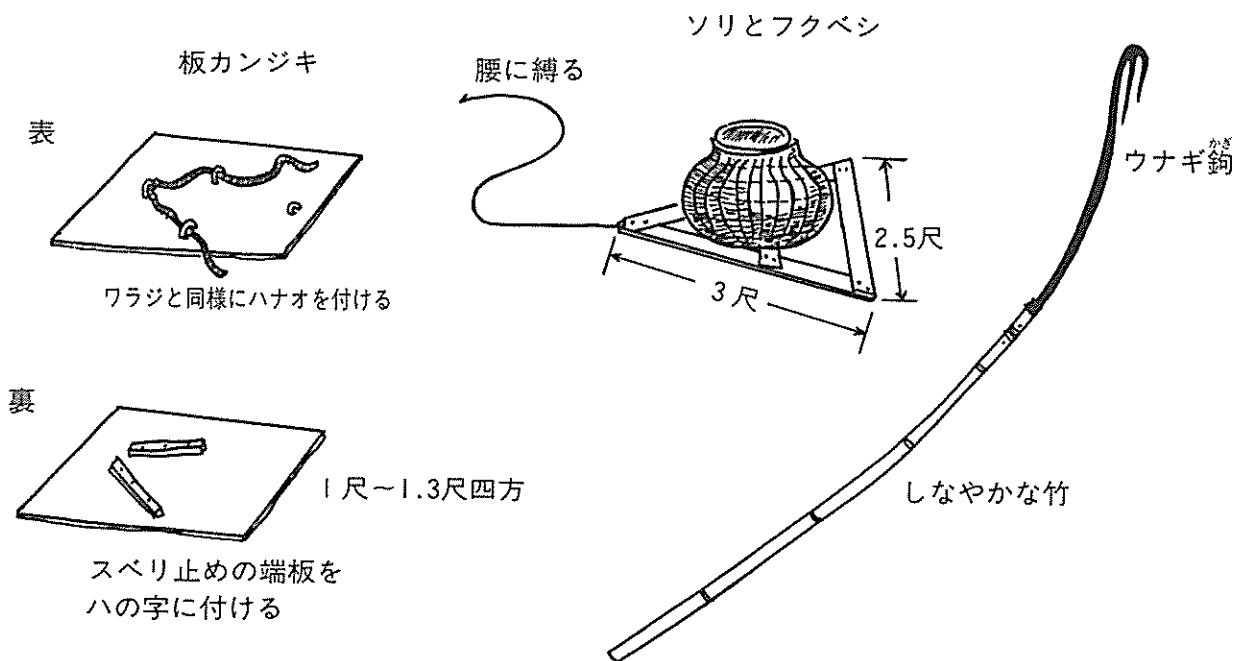
## ヨトボシ（夜灯し）

灯火を利用して、夜間ウナギを見つけて搔き獲る漁法で、八十八夜頃から始められる。主としてウナギを獲るが、スズキやクロダイも混獲され、晩秋にはハゼを狙うこともある。この漁はカーバイトランプの普及後に始められた。闇夜に湾内の1 m前後の浅瀬であればどこでも操業され、潮や風の状況によって漁場を選定した。この漁ではウナギ鉤を水棹代りにして船を操るので、鉤は腰の強い厚目のものを特別にあつらえた。長さは2.8 - 3尺にし、1.5 - 2 尋の柄を付け、水深によって長短を使い分けた。

漁場に着くと、灯火を水面すれすれに設置し、船を進めながらウナギが静止していたり、泳ぎ回っているのを発見したら、瞬時に鉤で搔き揚げる。敏捷な動作が必要とされる。

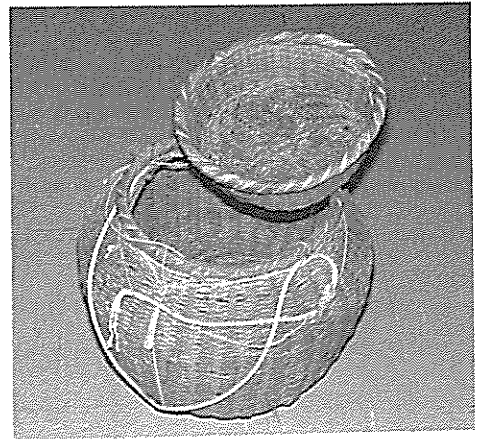
魚類はウナギに限らず金属音には敏感なので、鉤が石などにあたらないよう注意しなければならない。戦後になるとバッテリーによる電灯が使用されるようになり、光度が増したが、ウナギそのものが減少したため、現在ではこの漁もすたれてしまっている。

## カツ搔き（徒搔き）



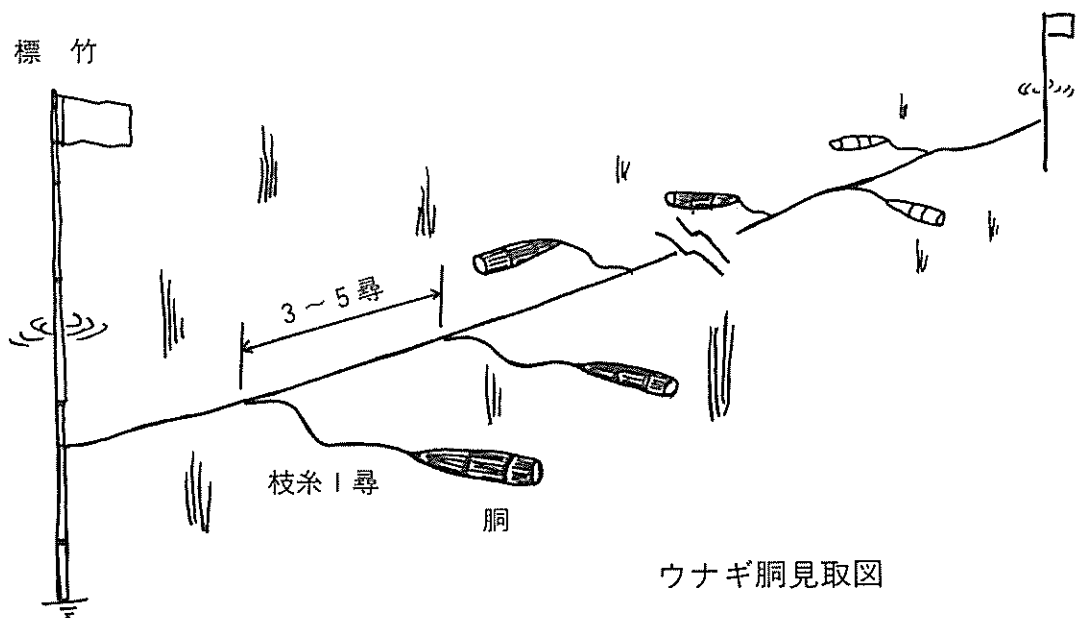
カツ搔き漁具見取図

4～5月頃になって、昼間潮が引いて浅瀬が干潟になるようになった時、カンジキを履いて干潟を歩き回り、ウナギが潜んでいる穴を見つけ、掻き揚げる徒漁である。鉤は1.5～2尺で弾力のある竹の柄を取り付ける。カンジキは体重に応じて大小あるが、およそ1尺四方の板カンジキで、獲ったウナギを入れるためのフクベン（畚）を乗せた三角形のソリに綱をつけ、腰にくくり付けて引きながら歩く。かつては2坪ほどの所に20～30本のウナギがもぐっていたこともあり、思わぬ大漁をしたという。



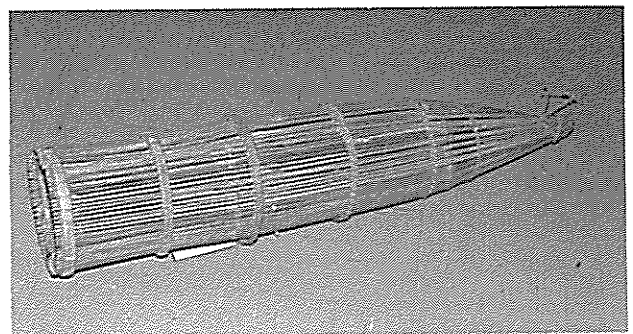
ウナギを入れるフクベン

## ウナギ 洞



ウナギ洞見取図

竹の簀でつくることから簀洞ともいう。マダケを2尺5寸に切り揃え、幅4～3分に割って厚さ1分に肉部をはぎ取る。その長さの2割ほどを残して三つ割りか四つ割にする。次に細いシュロ縄で洞の円周分をスタレ状に編み、円筒形に結び合せる。洞の内と外にタガをはめて正円形に整える。最後にアバと呼ばれる漏斗状の返しを付けて完成する。



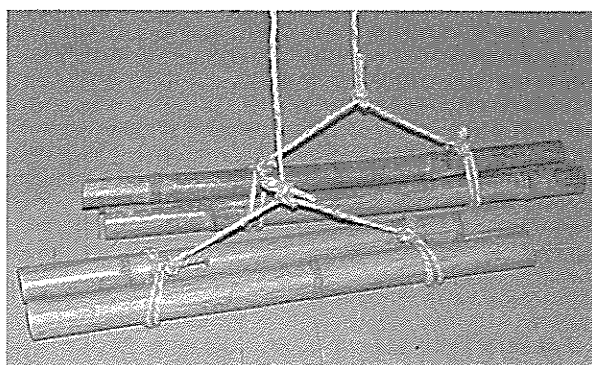
ウナギ洞

漁法は幹繩に3～5尋間隔に15～20個の胴を取り付け、餌としてミミズかタニシを潰して一掴み入れる。漁場を選定して胴を仕掛け翌朝引き揚げる。中の餌に誘われてエビが入り込むことがあり、このエビを狙ってウナギも入る。

現在、この胴を作れる者はほとんどおらず、漁法とともに胴作りの技法も消えようとしている。

## タガッポ漬け

タガッポと呼ぶ竹の筒を用いた一種の胴漁法である。唐竹の太さ1～1.6寸のものを長さ2尺3寸もしくは2尺5寸に切り揃え、節を節抜きという道具で取り除き筒状にする。2本または細目のものは3本をまとめ、2カ所を縄で束ねて縄の端を中央で一つに結ぶ。これに6尺ほどの縄をつけたものをヒトサゲといい、幹繩に1尋間隔で25～30



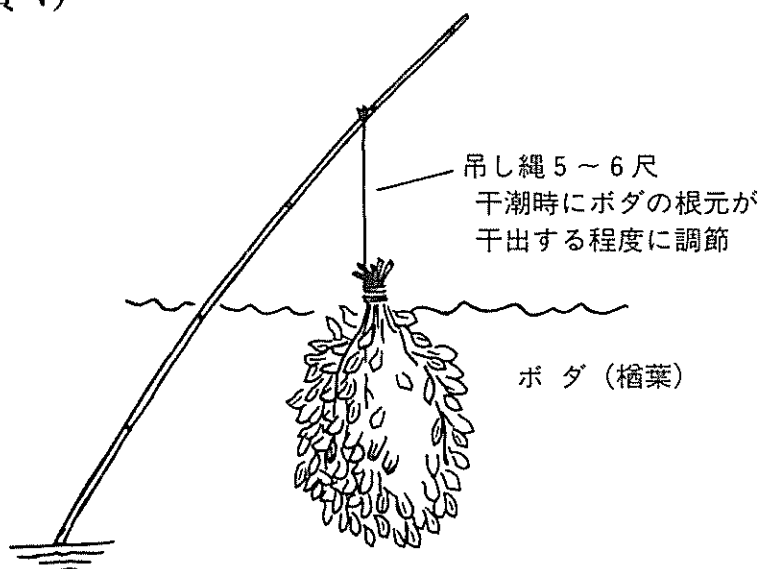
タガッポ

束取り付けたものをヒトハイという。専門家は30～40ハイを用いた。材料の竹は春先に購入し、節抜き後に一旦堀や川に漬け込んで渋抜きをする。この渋抜きをしないとウナギはよく入らない。

漁期は4月から11月初旬までで、終期にはマハゼが大量に混獲されることもある。漁場は干潮時に水深が1尺ぐらいになるところで、アマモが繁茂している場所や滞筋周辺などがよい。タガッポを船に積み、漁場で幹繩の一方を竹に結んで挿す。全部投入を終えらるともう一方の端を挿竹に結んで固定する。1晩おいて翌日の干潮時に揚げるが、返しが付いていないため、引き揚げる時は静かにタガッポが水平になるようにし、水面で手網ですくい揚げる。太い筒には2尾同時に入っていることもある。

この漁法のポイントは、漁場に分散して仕掛けることで、漁獲が多い場所へ適宜移動させる。この際も全部集中させるのではなく、一部は残しておき、その後の状況を観察する。終漁後はタガッポを泥に沈めて保管し、翌年縄を結び直す。タガッポは2年目以降から、よく入るようになるが、耐用年数は4～5年である。

## ボダ漬け



ボダ漬け漁具見取図

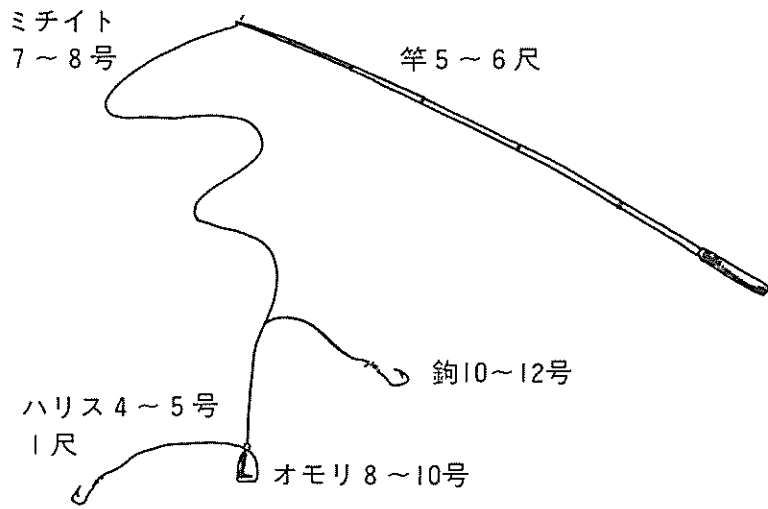
かつては材料によって、檜葉を用いたものをナラッパ漬け、ホンダワラ科の海藻類を用いたものをボダ漬けと呼び分けていたが、現在では総称してボダ漬けと呼んでいる。檜葉は7月頃の青葉が茂ったものを用い、長さ2尺5～6寸ほどの枝を12～13本まとめて束にする。海藻の場合も同様に根元を束ねて、長さ3尺前後にする。5～6尺のツルシ縄を付け、海底に斜め挿した竹に結ぶ。その際、ボダの根元が干潮時に5～6寸干上がる程度に吊り下げる。ボダをすくい揚げる時の要領は、船を静かに漕ぎ寄せて、水棹を挿して船を固定し、叉手網を下ろしてから手鉤でボダを引き入れる。船縁を支点にして叉手網を水平に持ち上げ、ボダをゆすってウナギを払い落とす。

## 6 ネウ 漁

ネウは当地方におけるアイナメの地方名で、根魚の字を当てるように岩礁性魚類の代表種である。砂泥域でもカキ棚の下や藻場などに見られることもある。この魚は餌の食い付きが荒く、釣りやすいことから、釣漁や遊漁の好対象となる。

### 釣 り

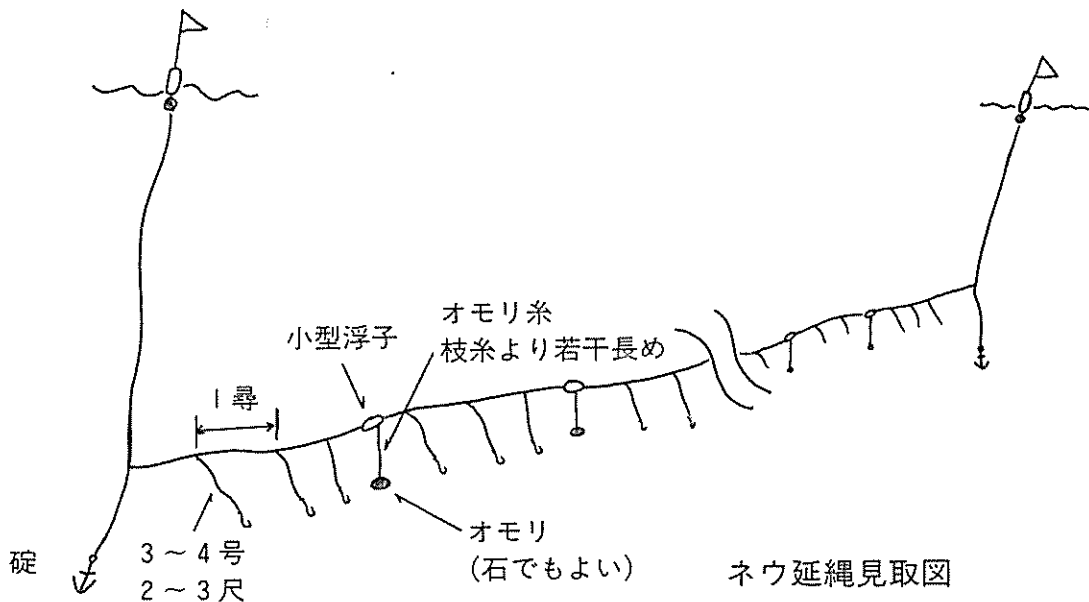
漁期は周年であるが、なかでも4～6月と秋口の9～10月が好漁期である。仕掛けは図のように簡単で、イシモチ釣りなどにも併用される。餌はゴカイ類、二枚貝のムキ身、ホヤ、ウニなどと幅広いが、時期・漁場・天候な



ネウ釣り漁具見取図

どの条件によって食いが異なり、好漁を得るためには巧みに使い分けなければならない。岩礁域で釣るため根掛りには十分な注意を要する。

### 延 縄



ネウ延縄見取図

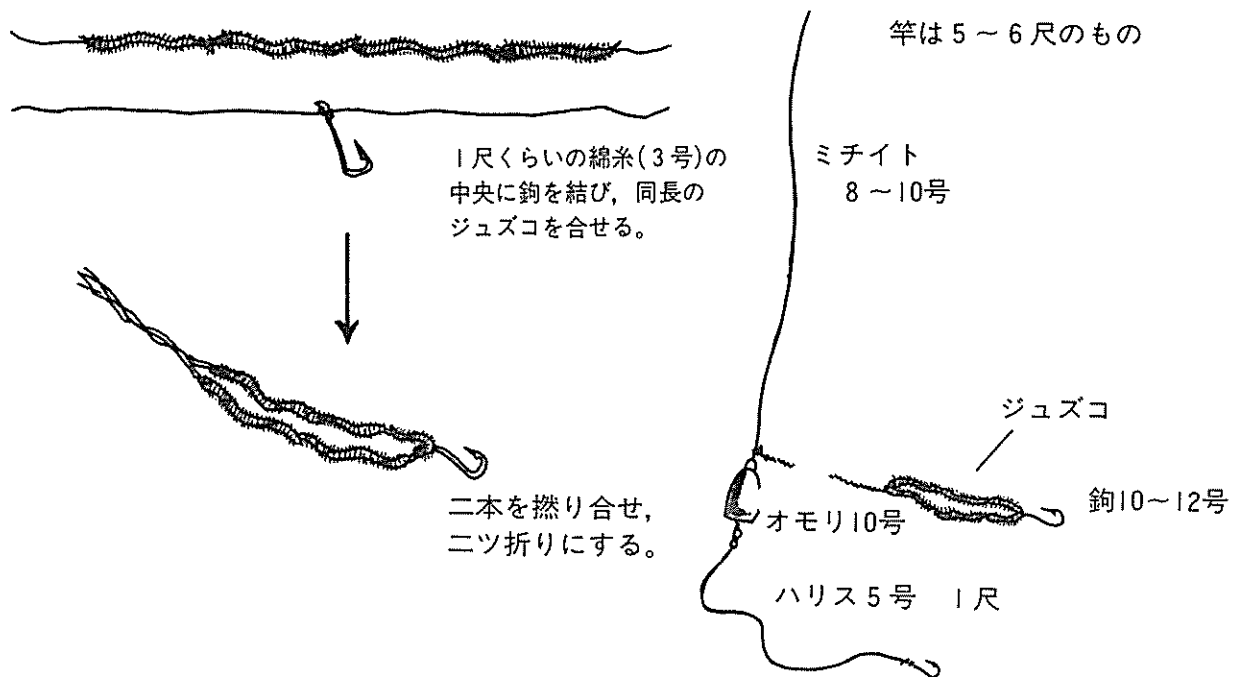
コナブチ（小縄打）と呼ばれ、ハゼ延縄やウナギ・ハモ延縄を転用してもできるが、外海の岩礁域で操業する場合は、幹糸を一回り太目の15～20号を使用する方がよい。根掛りを防止するため、適所に小型の浮子を付けるのも有効である。餌はカラスガイ（オキシジミ）、アサリ、シウリガイ（ムラサキイガイ）などの二枚貝のムキ身、イカの切身、エビ類などを用い、エビの場合はメバルや小型のスズキが大量に混獲されることもある。操業の手順は、他魚種の場合と同様である。

## 7 カレイ 漁

松島湾内で漁獲されるカレイ類は主としてアオメ（マコガレイ）、イシガレイ、ハダガレイ（ホシガレイ）、カワガレイ（ヌマガレイ）の4種である。ヒラメも若干見られるが、あまり多くはない。近年は遊漁者の増加によって、周年釣獲されているが、春先のカレイ類は産卵後のためやせており、脂がなくてうまくない。脂がのっておいしくなるのは4月末以降である。

### 釣 り

ジュズコ(カレイ用)の作り方



カレイ釣り漁具見取図

漁期は旧暦8月の十五夜過ぎからで、秋風が立って海水も澄み、水温も下り始めると本番を迎える。漁場は鐘島・石浜・寒風沢・鰐ヶ渕などの各水道部が主体となる。仕掛けは

前記のハゼ釣りに用いるジュズコの先端に10～12号の鉤を付けたもので、さらに錘から1尺ぐらいのハリスを出し2本鉤とする(図)。餌はアサリやオキシジミのムキ身を使うが、マエバ(オニイソメ)にすることもある。釣り方は流し釣りで、潮に船を乗せて流しながら、竿を上下して錘で海底をこづくようにする。当りは最初ハッキリしないが、重みがあって2段に引く。その時1尺ぐらい上げ、なお当たりがあれば、今度は少し送り込んで間をおいてから一気に合せる。マコガレイが主体となるが、11～12月にはイシガレイも多く混じる。ホシガレイは希に混獲される程度である。

## 延 縄

カレイナ(縄)と呼び、3～4月頃から刺網漁と同時に始める。縄の仕立ては他の延縄とほとんど同じである。餌はマエバ(オニイソメ)の他、アサリやオキシジミのムキ身を用いる。漁場は滞筋か藻のない平場で、早朝の夜明け前に5～10枚仕掛ける。前日に仕掛けてもよいが、夜間はスイムシ(等脚類の一種)の活動が活発で、朝までの間に獲物が食害されることがある。かつては鐘島水道付近に多かったが、近年は湾内全域に発生し、その被害も大きくなっている。

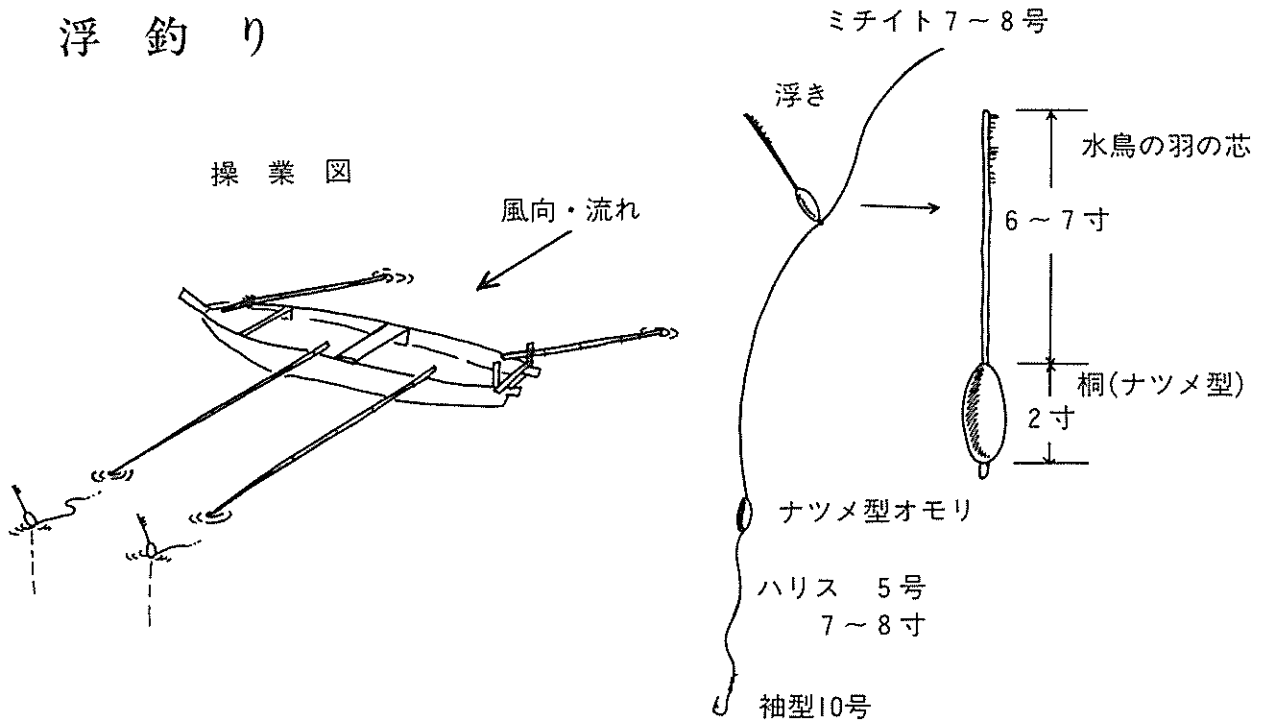
## 刺 網

カレイ網は底刺網で、かつては麻糸を使っていたが、現在は化学繊維が使用されている。目合いは3～4寸が普通で、特大のカレイを狙う場合は5～6寸の目合いにすることもあがるが、内湾で使用されることは少ない。カレイ刺網漁の適期は11～12月で、産卵のために接岸する時が好漁となる。操業方法は他の底刺網と同様である。

## 8 オオガイ釣り

オオガイはウグイの降海型の地方名で、秋口になると湾内に姿を見せるようになる。当才魚から1年魚までは周年湾内にいることもある。外洋にいる時期のものは、味が悪く漁獲の対象にはされない。オオガイ釣りには以下の浮釣りと底釣りがあ

### 浮釣



オオガイ浮釣り漁具見取図

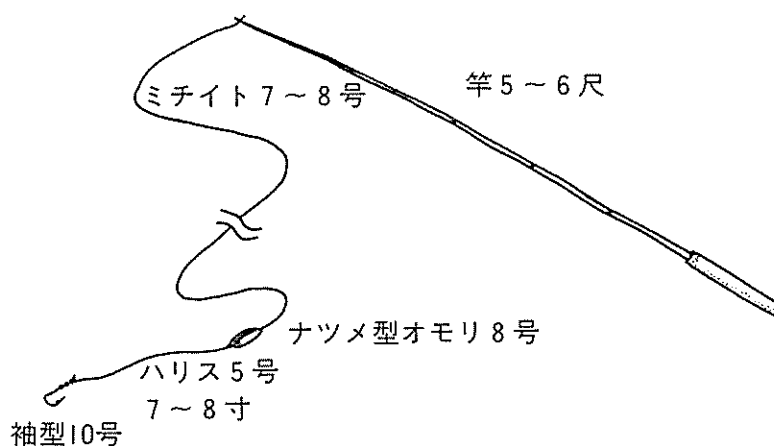
時期により若干の違いがあるが、ほぼ湾内全域で行われる。浮子は桐を2寸ぐらいのナツメ型にしたものの先に、水鳥の羽根の芯を付けたもので、鉤には袖型の10号程度を用いる。餌はゴカイで2~3匹を房掛けにする。漁場では、水棹を潮の上流へ向けて斜に突き立て船縁に縛り付け、船が流れに直角になるように固定する。タナは海底から1.5~2尺で、藻が生えている場合は藻先の深さにウキ下を調節する。竿は2本使用し、潮下へ振り込んで、竿先を水に浸したまま竿元を船縁に掛けて当たりを待つ。当たりは小型魚ほど強く、浮子を消し込んだりするが、大型魚は横に移動したり、食い上げて浮子を倒したりする。合せは竿先を水面から跳ね上げる程度でよい。



## 底 釣 り

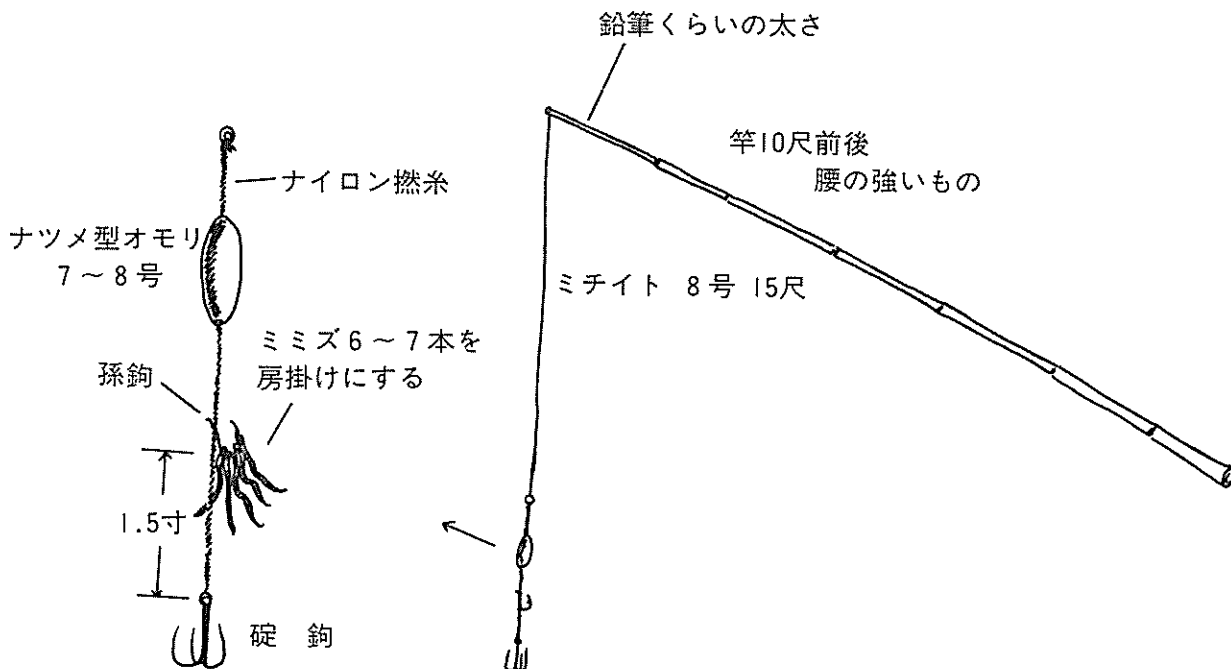
湾口部の各水道が主な漁場となる。竿は5～6尺ぐらいのもので、スズキ釣りと同じものでよい。餌は浮釣りと同じでよいが、ナツメ型8号程度の錘で底に沈めて釣る。秋遅くから初冬にかけて、外洋が荒れ、水が濁った時の夜明けや夕暮れ時が好条件となる。魚が浮いて、あちこちに輪が広がる水域を見つけ

て竿を下ろし、錘が海底から2～5尺の間を静かに上下するように竿を操作する。食い付くと、ふっと軽くなるのでそれに合せる。好漁の時は1kg前後の大型魚が大量に釣れる。



オオガイ底釣り漁具見取図

## 9 ボラ 釣 り

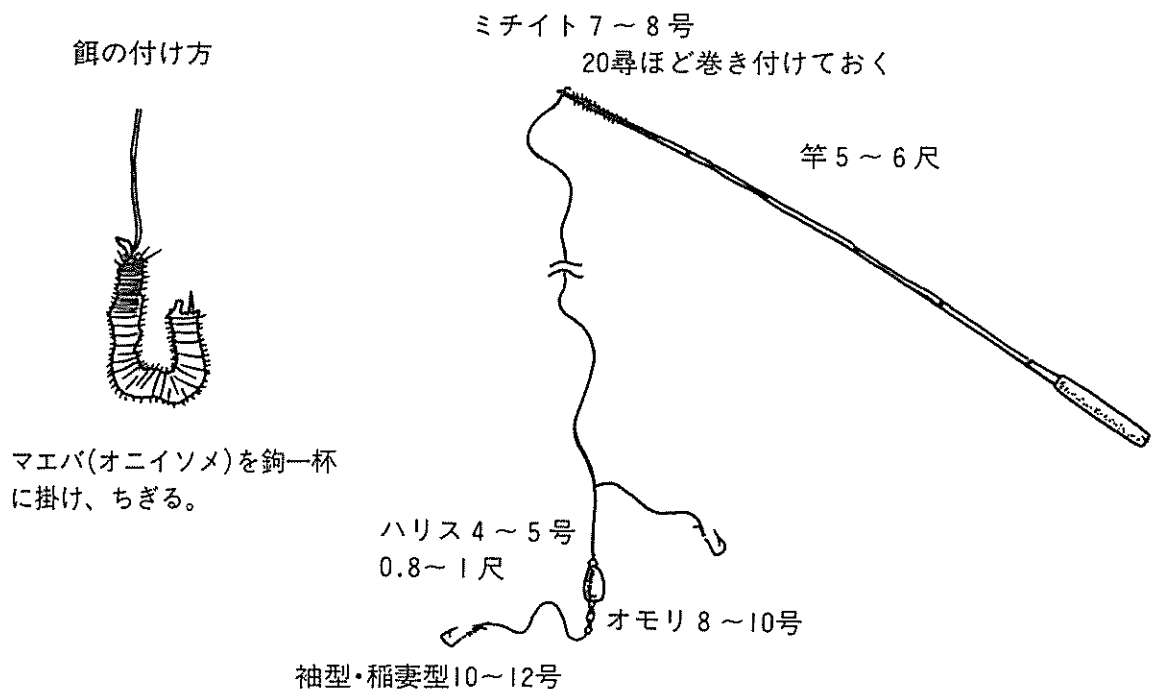


ボラ釣り漁具見取図

ボラは春4月頃から湾内に姿を見せるようになる。乗っ込み当初のボラは刺網などで漁獲される。夏になり水温が上昇するにつれ、表層を遊泳するようになると、ボラ延縄（サヨリ浮延縄を参照）に掛かるようになるが、夏ボラは販売の対象とはならない。

秋10月頃になり水温が低下すると、底層に下がり海底やカキ棚などのケイソウを食むようになり、この頃がボラ釣りの適期となる。竿は10尺5寸で、15尺のテグス（8号）を付け、図のようにナツメ型錘の下にナイロン撚糸で孫鉤と碇鉤を組み合わせた仕掛けを付ける。孫鉤にはミミズ6～7本を房掛けにする。タナの取り方は、釣鉤が海底から1～2尺の位置にくるようにし、ミミズが揺れ動くように竿先を小刻みに上下させる。当たりがあれば一気に合せ、下の碇鉤にボラを掛け、強引に引き揚げる。この釣り方は、昭和の始めに東京の大森出身の故茨田新太郎氏によって松島町磯崎地区にもたらされたもので、前記のサヨリ浮延縄、それにボラ延縄も同氏の教示によるものである。この釣り方で、ミョウゲツ（メナダ）も混獲されることがある。

## 10 イシモチ釣り



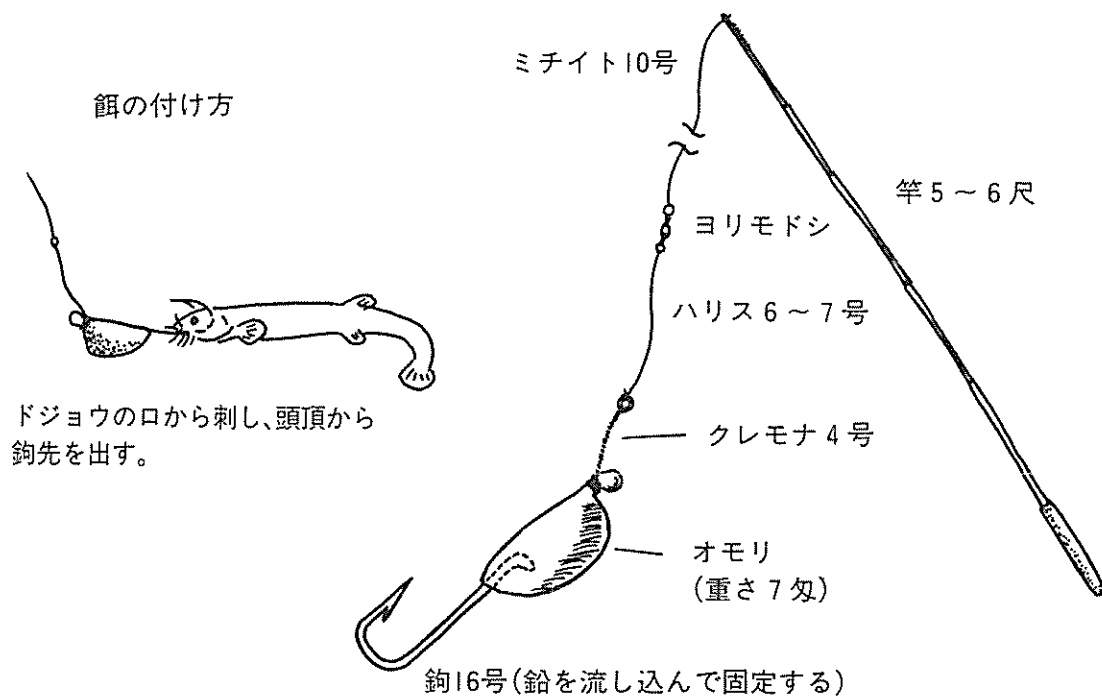
イシモチ釣り漁具見取図

イシモチは6月下旬から湾内に姿を見せるようになり、漁期は7月一杯までである。当地方でいうイシモチは、シログチとニベの総称であり、後者を特にコケブカと言って区別することもある。出現域は鐘島・代ヶ崎の両水道部周辺に限られており、ニベは鐘島水道より内湾には決して入らない。竿は5～6尺で腰が強くウラ調子の柔らかいものがよく、ナイロンテグス（7号）を20尋ほど付ける。ハリスは4～5号で0.8～1尺、鉤は袖型もしくは稲妻型の10～12号で、錘の上下にそれぞれ取り付ける。餌はマエバ（オニイソメ）が

最もよく、ない時はハマミミズ（イソミミズ）かフクロゴカイ（スゴカイイソメ）を代用する。

漁場では、まず船を潮上に持ってゆき、風向や潮流の具合を見て船を流れに乗せる。仕掛けを投入し、錘が海底に着くまで道糸を繰り出す。錘が底から0.5～1尺になるように道糸を巻き戻す。（道糸の長さの調整はハゼのジュズコ釣り参照）。竿を静かに上下して当たりを待つ。当たりは様々であるが、4～5寸の小型魚以外は概して合せやすい。イシモチはいたみやすい魚なので、釣り揚げたらすぐ処理をすることが望ましい。

## 11 スイ釣り



スイ釣り漁具見取図

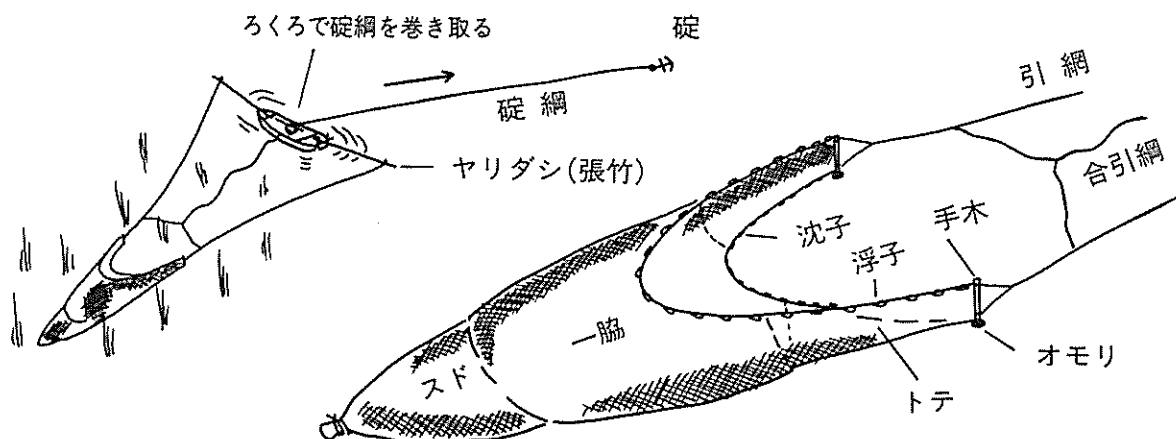
スイはソイ類の総称で、クロソイ、タケノコメバル、キツネメバルなどがある。釣りは種類にかかわらず同様で、4～11月が漁期となる。漁場は外洋に面した岩礁域で、起伏の激しい所がよい。仕掛けは図のようなテンヤ<sup>150</sup>鉤で、餌にはドジョウもしくはギンポを用いる。船を潮上から流しながら、根の急な落ち込みを狙って、仕掛けを投入する。錘が底に着いたら、竿を一杯に振り上げ、錘が沈む速さに合わせて竿を下げる。この動作を繰り返すが、スイは必ず下げる時に食い付くので、注意を集中させる。当たりは糸が張って根掛りをしたような重みとして感じる。ここで合わせず、しばらく待つと、重みに加えてゴツゴツとした強い当たりがあり、次に横に引き始めるので、この時に合わせる。2 kg以上の

魚の場合は強引に根に引き込もうとするので、それをさせないようにする。

この釣りもスズキの一本釣りと同様、戦後一時とだえた技法であるが、赤間敏夫氏らの努力の末、復活した釣りである。

## 12 アピコ網

操業図



アピコ網見取図

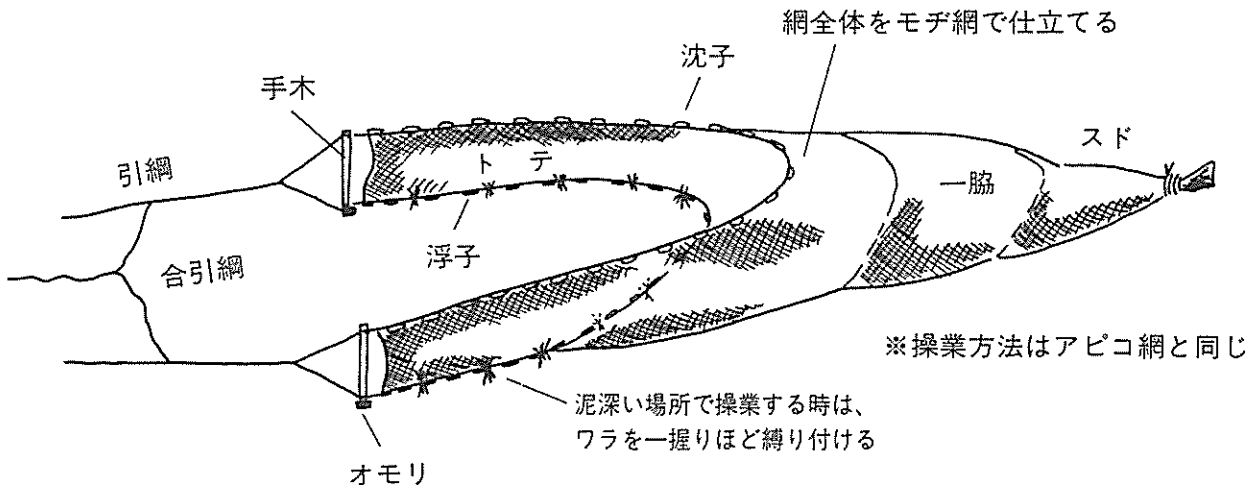
アピコとはヘビハゼやニクハゼなどのアマモ場に生息する中層遊泳性のハゼ科魚類の総称で、ほとんどは佃煮の原料として取り引きされたが、汁物にして食べたり、ハモ（マアナゴ）魚の餌としても利用されていた。現在はアマモ場が減少したためか、餌にするほどにも漁獲されなくなった。

アピコ網はモチ網を使用した引網で、おおよその構造は図に示した通りである。網はトテ・一脇・スドの3部から構成され、トテとは袖網に相当し、玉すきの荒目の網でもよい。モチ網の入手が容易でなかった頃は、質流れの蚊帳を求め、ほどいて網に仕立て、さらにコールタールで染め強度を保つようにして使っていた。

漁期は7月頃からで、主にアマモ場で操業した。船の前後から張り出した竹竿に左右の引網を結び、網と反対方向に延ばしてある碇網をろくろで巻き取る。船とともに網が碇方向へ寄せられたら、合引網で網を引き寄せ、魚を回収する。また、風がある時は、帆を張って船を流した（打瀬網）。この漁法は茨城県の霞ヶ浦のワカサギ網を導入したと言われているが、定かではない。

特にコマカと呼ばれるニクハゼの方は、宮戸・浦戸方面の藻場に多く、カキ、ノリの養殖施設がなかった往時は、打瀬網で一網に1～2斗もの漁獲があった。

### 13 エサダ・エビ網



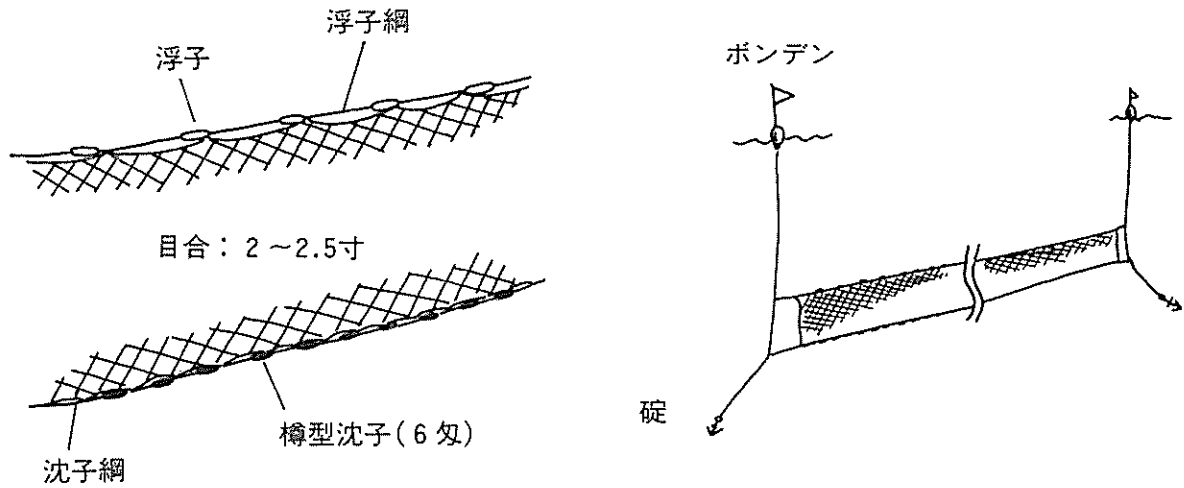
エサダ網見取図

この漁法は、基本的には前記のアピコ網と変らない。ただし、エサダ（アミ類）網は、網全体をモヂ網で仕立て、泥場でも操業するので泥を引き込まないように、網の足方の錘を適宜にはずしたり、ワラを一握りほど足方の綱に縛り付けたりする。エビ網はアピコ網同様藻場を引くので泥の対策は必要ない。しかし、藻が密生している所では、網が巻き込まれて棒状になってしまうので、これを防ぐために見張所といって、6 尺ぐらいの細い竹を3～5本足方に取り付けることもある。

エサダ引きは、早春の2～3月から始められる。この頃は外洋に面した砂浜域が漁場となり、やがて、内湾へと移行する。湾内に入ったエサダは5～6月頃産卵し、8月頃には夏エサダといって漁獲され、これはほとんど塩蔵加工されていた。

エビ網漁は4月末頃から始まり、6月一杯まで操業し、7月に入ると休漁となる。それはこの時期になるとエビの産卵期となるので、資源保護のため固く守られていた。また、ヨカ（夜稼）といって、夜間操業を行うと、ウナギなども混獲され収量も多くなるが、やはり自主的に禁止していた。

## 14 コノシロ・ハジキエビ網



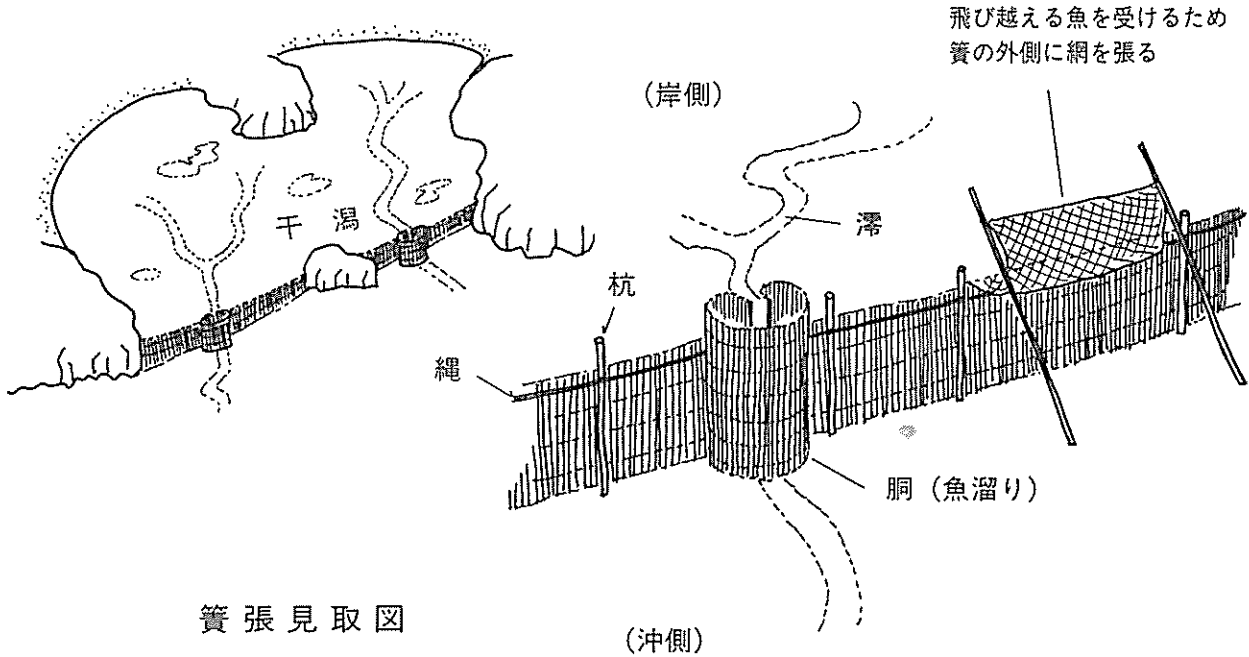
コノシロ・ハジキエビ網見取図

コノシロとハジキエビ（シャコ）の漁法は、ともに底刺網で網地の仕様や仕立て方が同じなので、一括してここに挙げる。網の素材は、昭和30年以前は麻撚糸や綿糸、それ以降アミラン撚糸になり、昭和50年以降はアミランテグス（3～5号）である。目合いは2～2.5寸で、魚の大小によって使い分ける。

コノシロの漁期は6～8月で、漁場は湾内全域、ハジキエビは5～6月で、外洋に面した砂泥域で操業する。

# 15 スバリ 漁

## 操業図



簀張見取図

張切簀（ハッキリス）または単に簀張（スバリ）とも呼ばれ、5～10名の協同作業で行う。干潮時に干潟になる入江や島に囲まれた浅瀬で、しかも満潮時に浮魚類が多く回遊するような水域を簀で仕切り、中の魚を漁獲する方法である。対象魚は主にボラやミョウゲツ（メナダ）で、クロダイやスズキも混獲される。秋口にはオオガイ（ウグイ）が多くなる。昼間の干潮時に魚を回収するため、漁期は4月から9月までである。

簀は幅7～8尺で、場所にもよるが、継ぎ合せて200～300間は要する。操業に当たっては、前日の満潮時に入江や島陰などを船で見回り、魚の回遊状況を観察して、場所を選定しておく。満潮時の1～2時間前に、まず杭を打つ。杭は長さ10尺前後のもので、間隔は3～4間とする。杭打ちに引き続き、杭の頭部を縄で連結し、それに簀を掛けて固定してゆく。この間の作業は40～60分で完了しなければならない。

簀を張り終った部分では、すでに魚が跳び越し始めるので、簀の外側にそれを受け止めるよう網を張る（図）。干潮時になると、魚は溜筋や深みに集まってくるので、その部分の簀を開き、図のような魚溜りを設ける。やがて、干潟が出ると、潮溜りが各所にでき、そこで、魚が半ば泥に埋まっているので、カンジキ（ウナギ・ハモ漁カツ搔き参照）を履いて手網などですくい獲る。

## 16 カニ 漁

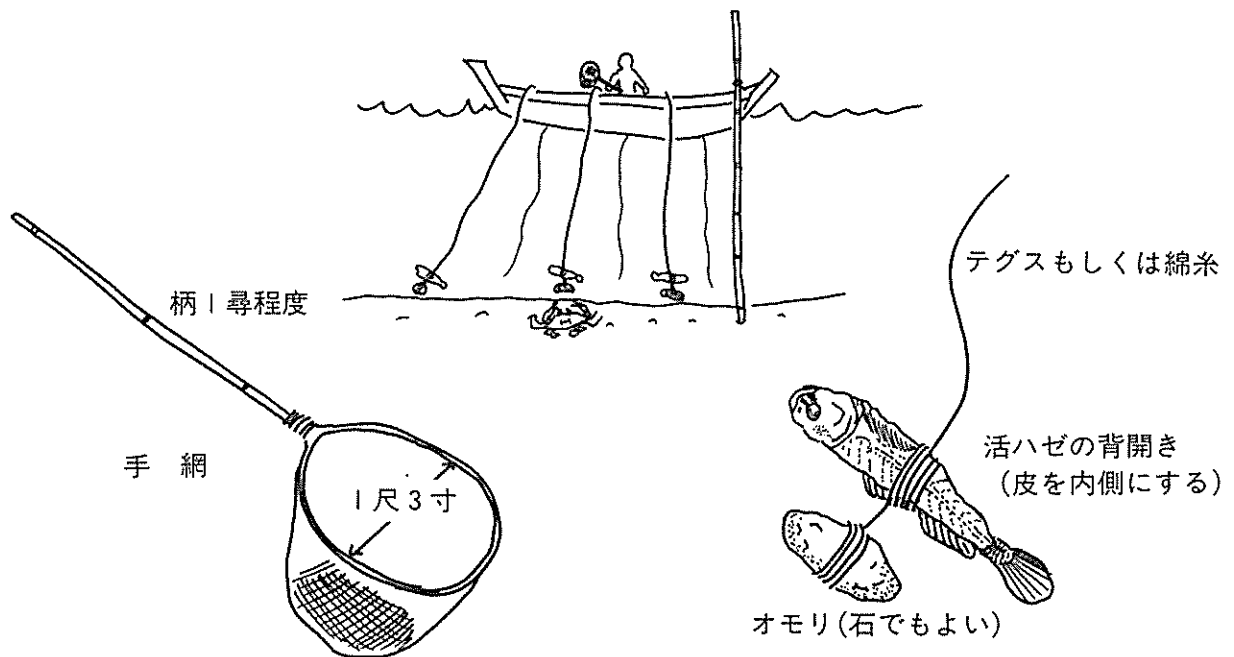
湾内で漁獲されるカニ類のうち、重要なものはガザミ、スクモガニ（トゲクリガニ）、ヘラガニ（イシガニ）の3種である。特にガザミは春から秋まで湾内で漁獲され、その後は外洋に出てゆくが、翌春になって砂浜域に接岸する頃の雌は、ほとんどが子持ちで値も高い。このガザミも昭和12～13年頃までは、湾内のどこでも漁獲されたが、その後しばらく減少し、近年になって県の栽培漁業センターが種苗放流を開始するようになってから、再び好漁となった。

### ガザミ釣り

7月から9月初旬に湾内の水深3～4mの平場が漁場となる。船を止め、テグスや綿糸の道糸に石や鉛の錘を付け、その上に生ハゼの背開きやアオガエルの皮を剥いだものを縛り付けて両舷から計6本ほど垂らしておく。餌がハゼの場合は、皮が内側になるように糸で縛る。竿は用いても用いなくてもよい。

ガザミが餌にしがみ付き、餌を食べ始めると、ゆるんでいた道糸が張って横に引かれるようになるので、静かに手繰り、カニの姿が見えたら水際で素速くすくい揚げる。ガザミは敏捷なので必ず手網を使わなければならない。上げ潮の流れが速い時は食い付きがよく、潮止りでは食い付いても揚げる途中で放してしまう。

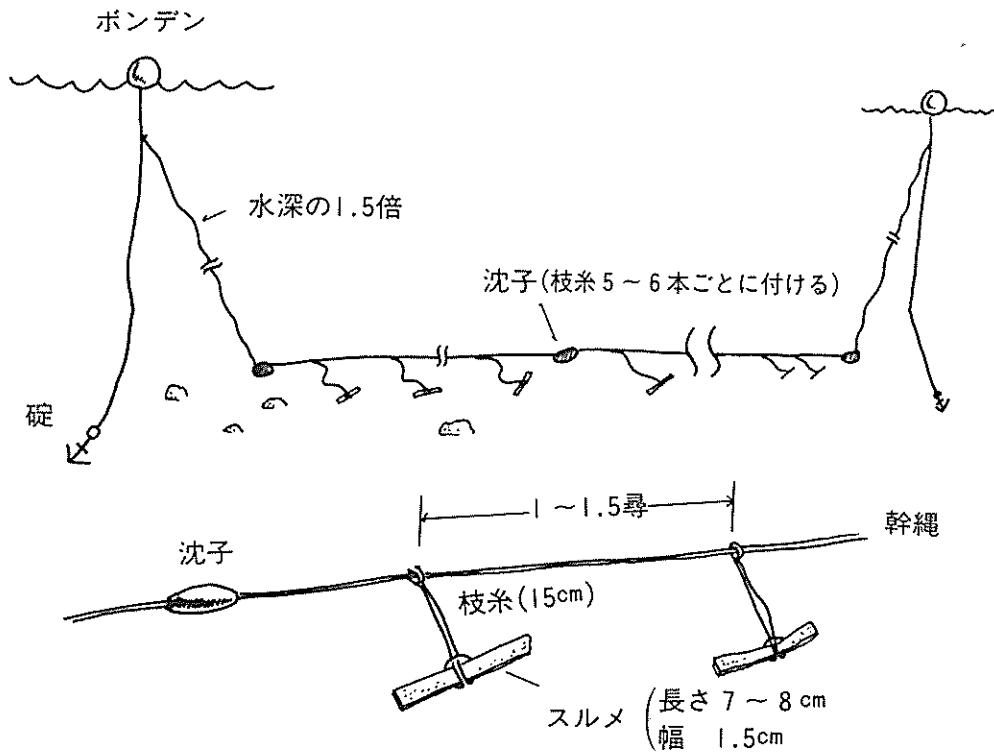
操業図



ガザミ釣り漁具見取図



## カニ 縄



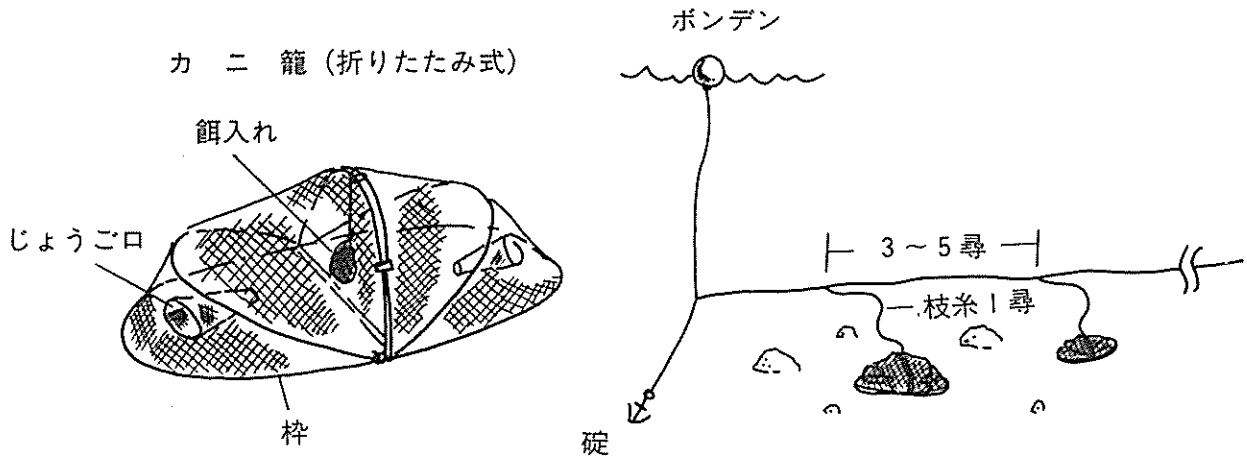
カニ縄見取図

この漁はスクモガニを対象としたもので、漁期は1～3月頃である。漁場は外洋部の砂泥域から湾口部にかけてであり、湾の奥までは入らない。

幹縄はクレモナ30～40号で100～150間。1～1.5尋間隔に15cmぐらいの枝糸を付け、それに長さ7～8cm、幅1.5cmほどに切ったスルメを結び付ける。なお、縄の沈みを速めるために、枝糸5～6本ごとに石か鉛の錘を付ける。

漁場で縄の投入が終わったら、最初に戻り幹縄を手繰りながら船を進め、揚がってきたカニを取り込む。この作業を繰り返し、餌がなくなっていた時は付け直す。カニの掛かりが少なくなれば、別の場所に移動する。

# カニ籠

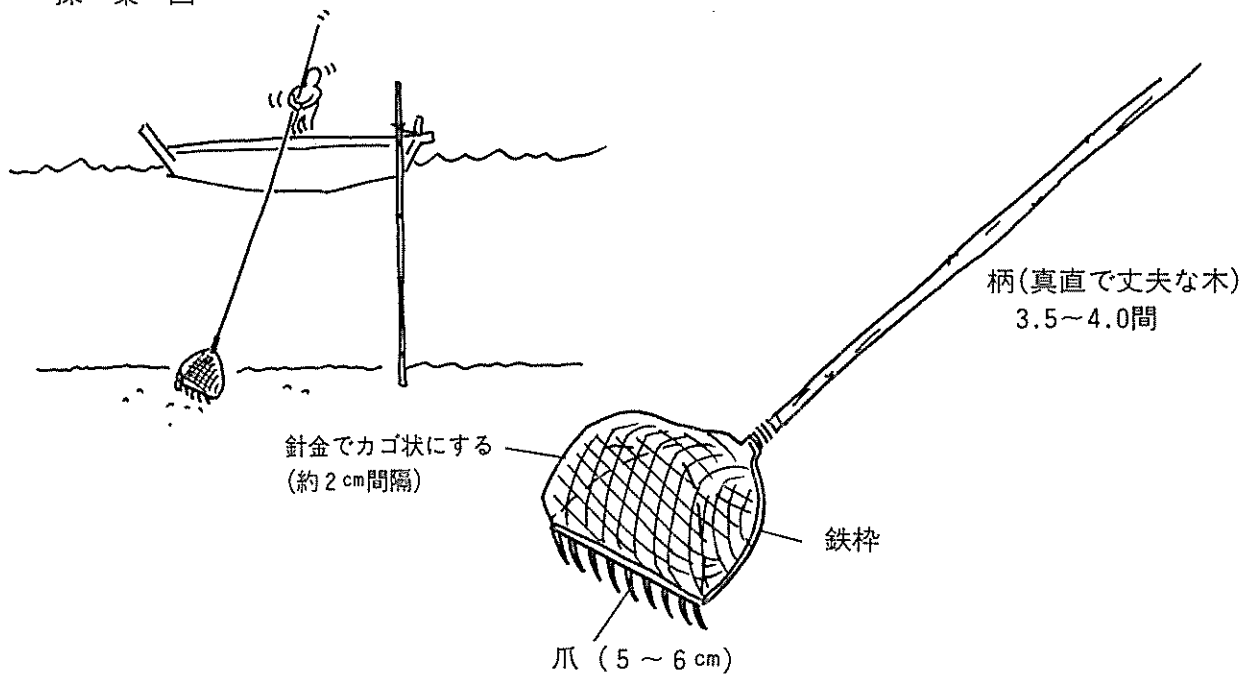


カニ籠見取図

この漁も漁期，漁場は前記のカニ縄と同じで，スクモガニ，ヘラガニが対象となる。ガザミが籠に入ることはない。籠は市販のものを使用するが，形状には様々ある。松島湾周辺で使用されているものは，針金の枠を半球形に展開して網を張ったもので，両側に入口がある。餌は主にサバやサンマを使用しているが，湾内で獲れるボラやオオガイ(ウグイ)にすると餌持ちが良く，入りも良い。餌は中央部に固定する。

## 17 アサリ漁

操業図

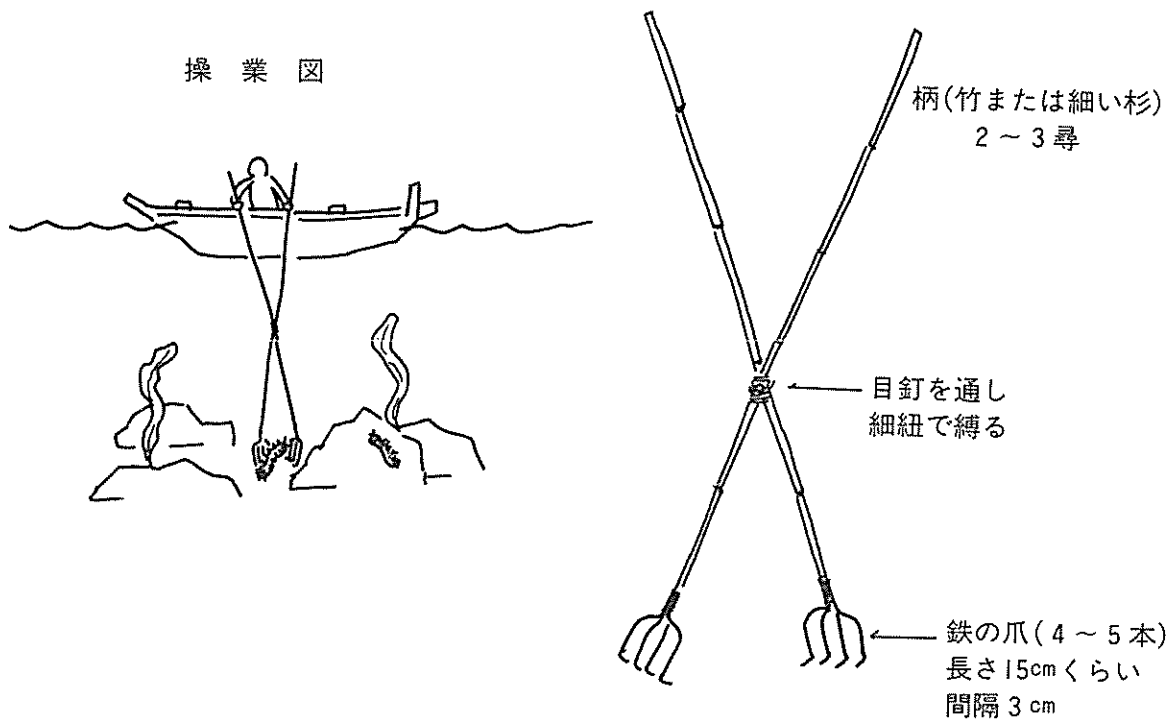


ジョレン見取図

現在、湾内のアサリ稚貝の発生状況が思わしくなく、他県からの稚貝を移入することによって、アサリ漁を続けている。かつては、各所の浅瀬にアサリが生息し、かなりの天然アサリが漁獲されていた。漁期は12月から翌年の4月頃までで、図のようなジョレンと呼ばれる道具で船上から搔き、干潮時の干潟では手掘りで獲った。なお、塩釜地区ではアサリの生息できなくなった入江の泥底域に客土を施し、稚貝を播種することによって、アサリ養殖漁場として復活させ、成果をあげている。

ちなみに、高城川の下流域では、かつてはシジミが漁獲され、昭和10年頃は5～6名が操業していた。夏季の土用の頃のもの、特に珍重され、「高城シジミ」として出荷されていた。このシジミも次第に漁獲が減少し、現在ではほとんど生息が見られなくなっている。

## 18 ナマコ・ニシカイ漁

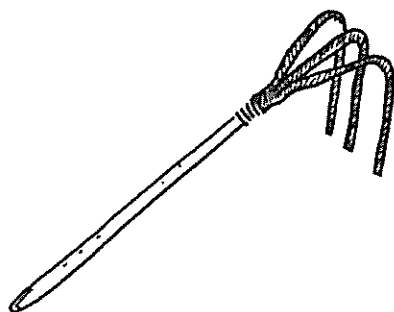


ハサミ漁具見取図

ナマコやニシカイ(アカニシ)の需要は、近年かなり高くなってきているが、かつては一部の者が採捕する程度であった。漁期はそれらが、浅瀬に寄ってくる7月頃で、漁場は主に浦戸諸島周辺であった。干潮時に船を出し、水深1～3mの浅瀬にいるものをカキバサミと呼ばれる道具で挟み揚げる漁法である。この道具は本来、天然ガキの採取に用いるものであるが、ナマコ、ニシカイ採りにも転用した。

## 19 エバ掘り

三本鍬（マエバ掘り用）



クマデ（ゴカイ・イソメ掘り用）



### エバ掘り漁具見取図

エバとは餌のことであり、釣りや延縄漁にはなくてはならないものである。したがって、その確保は重要な作業であり、漁業の一部として位置付けることができる。かつては、自家用の採取がほとんどであったが、近年の遊漁人口の増加にともない、副収入源の一つもなっている。

エバにはアサリ、カラスガイ（オキシジミ）、シウリガイ（ムラサキイガイ）などの二枚貝類やエビやカニなどの甲殻類も含まれるが、その代表的なものはゴカイ・イソメ類であり、単にエバ掘りという場合は、これらの採取を意味する。エバ掘りの対象種もいくつかあり、時期や場所、掘り方なども多少異なる。主なものは、マエバ（オニイソメ）、ワヤ（イソメの仲間）、ハマミミズ（イソミミズ）、ミズエバ（ゴカイ）、アマエ（イトメ）などである。

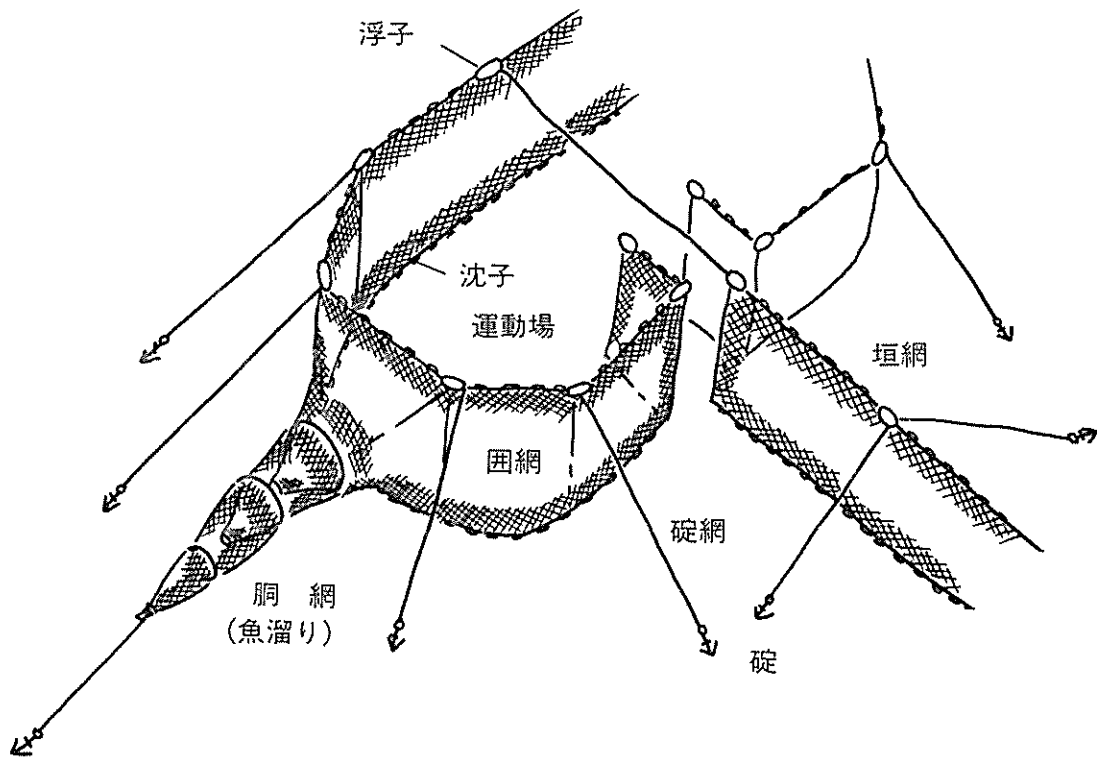
マエバは4月頃のネウ釣り、6～7月のイシモチ釣りなどに使われる。マエバは硬い土質の所や岩の間に生息し、また、非常に長いため、これを掘り起こすのは大変な重労働であった。8月になると、ワヤとハマミミズを掘り、主にハゼ釣りの餌とした。両種とも湾内各所の浜に生息し、干潮時に採取して3～4日分は確保できた。ハマミミズは生かし方によっては長持ちするので、一度に1升ぐらい掘ったという。9月末頃からはミズエバを掘り、オオガイ釣りやハゼ釣りのジュズゴに使用した。ミズエバは河口周辺の砂泥域に生息し、比較的楽に採取されたという。

アマエはウナギ釣りになくてはならない餌で、比較的長期に亘って採取された。アマエ掘りは女衆の仕事で、ハンコモモヒキに脚絆を着け、干潟に入り、泥の中から1本ずつ丁寧に引き出した。アマエは深くもぐり込んでいるため、2～3尺も掘り下げたが、干潮時の2～3時間で2升ほどは採取された。11月上旬頃になると、アマエは産卵のため泥から抜け出して水面を群泳することがある。それを石油カンテラや台湾トボシと呼ばれる竹筒に灯油を入れボロ布を挿し込んで火を点したものなどで照らし、小型の手網ですくい取った。現在はカーバイドランプや電灯が使われている。主なすくい場所は、淡水と海水が入り交じる下流域や堀などであった。さらに旧正月の頃になると、今度はミズエバが流れ出す。これが大量に流れ出ると、川面が赤くなるほどで、それを求めてオオガイ（ウグイ）が大群をなして河口付近にやってくる。それを網や延縄で漁獲することもあった。

## II 定置網漁

湾内の定置網漁には、ツボアミと呼ばれる小型定置網とスマキもしくはスタテ（簀建）と呼ばれるエリ漁の2種がある。これらの漁法は、索餌あるいは産卵のために来遊してくる魚群を予測される回遊路に網または簀を張りわたし、漁具の中に入るのを待って漁獲する消極的な方法である。両種とも基本的な構造は同じであるが、ツボアミは底が岩盤であったり、挿竹が届かない深所に設置されるのが一般的であり、スマキは泥底で比較的浅所に建てられる。

### 1 ツボアミ（小型定置網）

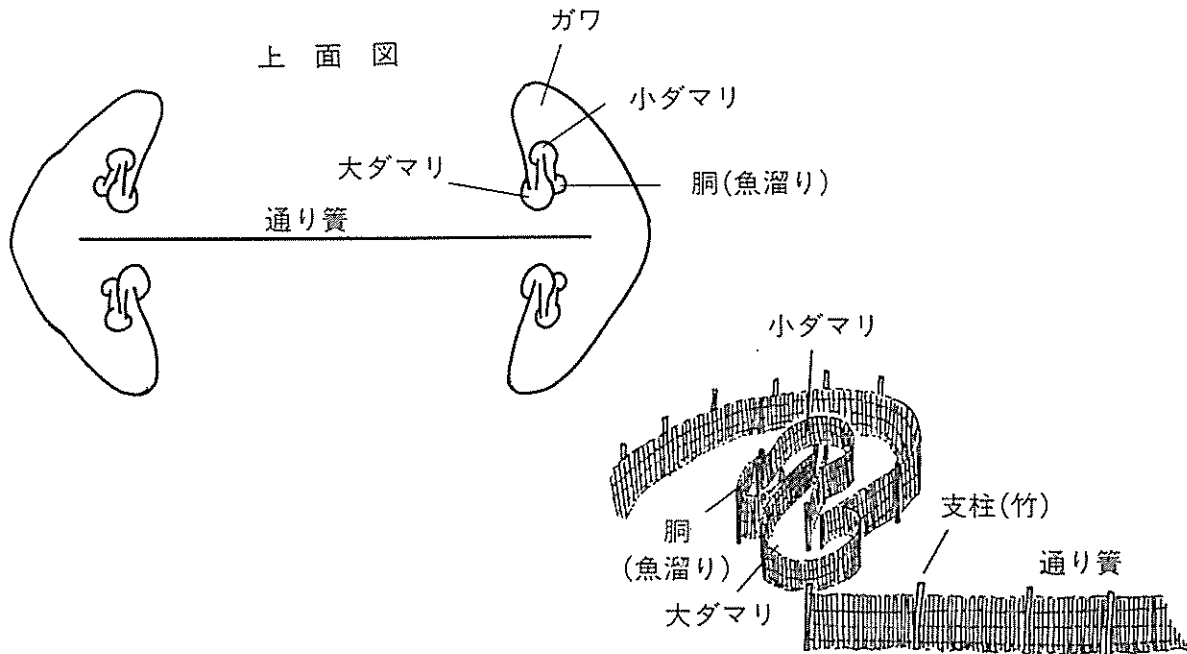


ツボアミ見取図

網の構造は設置する場所によって若干異なるが、基本的には垣網・罽網・胴網(魚溜り)の3部から構成される。魚は垣網に沿って泳ぎ、罽網内の運動場へ入る。やがて、返しが付いた胴網に入ったところで漁獲される。網を設置する時は、島や崎の突端を起点として垣網を延ばし、次いで罽網、胴網を投入して、浮き玉・ロープ・碇・サンドバッグなどで網の形を整えながら固定する。島や崎を起点とせず、湾の中央部に設置する場合は、垣網の両端に罽網を設けることもある。また、小型の網の場合は、碇の代わりに竹や杭の支柱で固定することもある。

漁期はかつて夏網と秋網の2期があり、夏網が終漁すると網を揚げ、補修して秋網を操業していた。夏網で漁獲される魚種は主に、ボラ、コノシロ、スズキ、ウミナタゴ、クロダイなどで、かつてはカマスが大量に入網したこともあった。一方、秋網はオオガイ（ウグイ）、マハゼ、ウナギ、カレイ類などで、稀にサケも入った。

## 2 スマキ（簀建）



スマキ見取図

この漁法は明治年間、海老原某氏により琵琶湖のエリ漁法が導入されたものとされており、かつて九ノ島でこの漁を操業していた伊藤家が提出した明治37年の免許願書が残っている。明治の後期には、松島湾内で20ヶ統の操業がみられたが、現在はわずかに観光用のものが1ヶ統操業しているだけである。

漁期は10月から翌年6月までの冬簀と、4～10月の夏簀の2期があった。漁獲される魚は前記のツボアミと同じである。設置にあたっての作業は、まず漁期前の簀編みから始められる。材料の竹は近隣町村から買い付け運搬し、浜の納屋で加工する。竹を水深に応じて10～13尺に切り揃え、太さによって2～8つ割りにして、幅がほぼ1寸になるようにする。割り竹は長さ3間のスタレ状に編み上げ、出来上がった簀はスアワセといって、継ぎ合せられる。この作業には近隣から女衆が集められて行われる。

建て込み作業には6～7名で約1週間を要し、船は3～4隻必要である。まずカタドリといって、縄で簀の位置と形を決める。次に縄に沿って、支柱となる竹を約3尺間隔に建て、それに簀を結束してゆく。最後に洞（魚溜り）の部分を作るが、ここは他より高くす

る。作業が完了すると、オキアガリといって、作業員全員に酒肴が振舞われた。その頃には一方の胴にはすでに魚が入っており、この魚も分配された。

魚は毎朝5時頃に回取に行き、スクリダモ・(すくい手網)と呼ばれる長さ3間ほどの手網ですくい揚げた。漁獲物はスマキザカナと呼ばれ、契約した仲買人と取り引きされた。

簀の耐用年数は3年ぐらいで、各終漁後には引き揚げ、毎年3分の1ほどを補修していた。





